



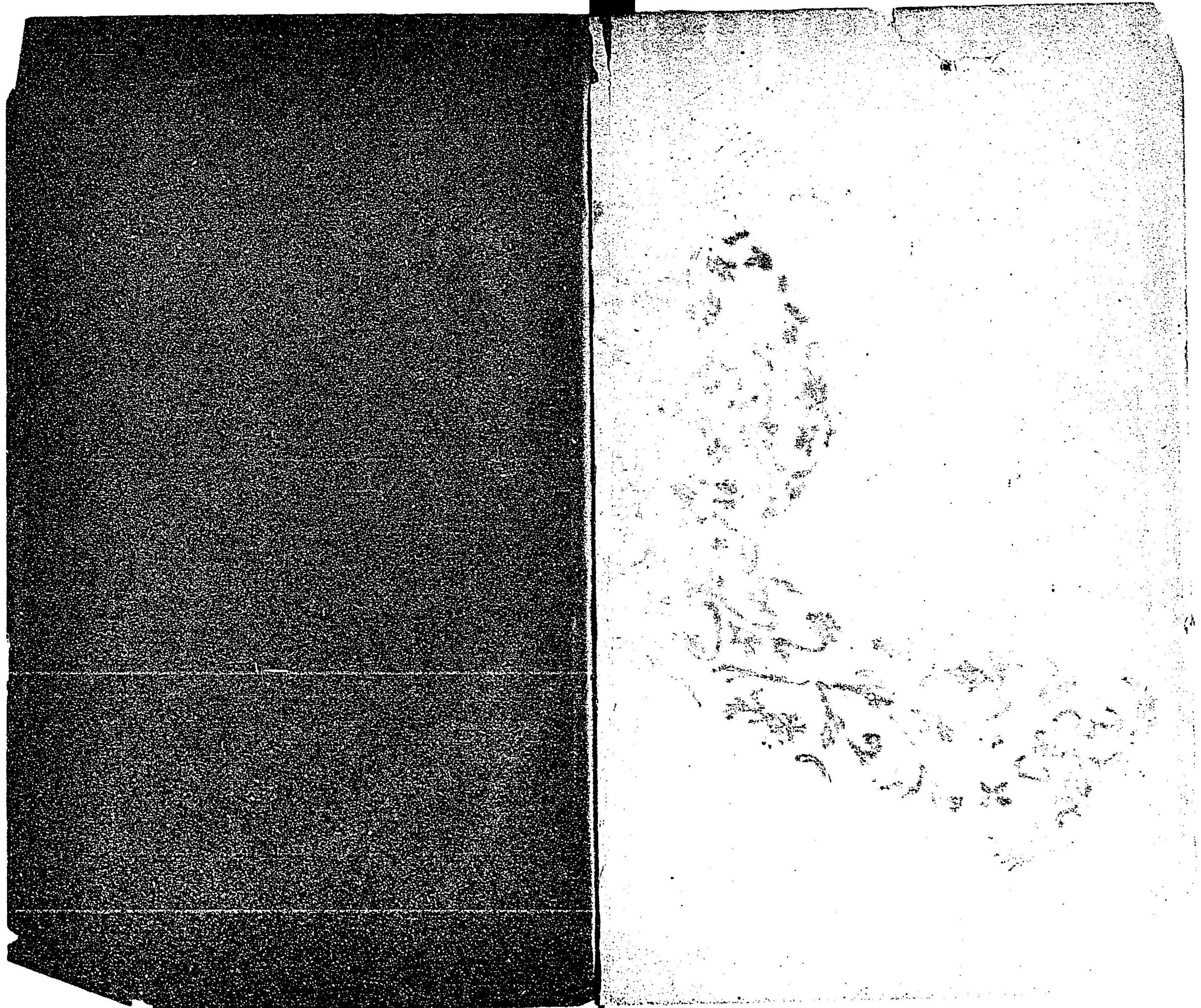
上野

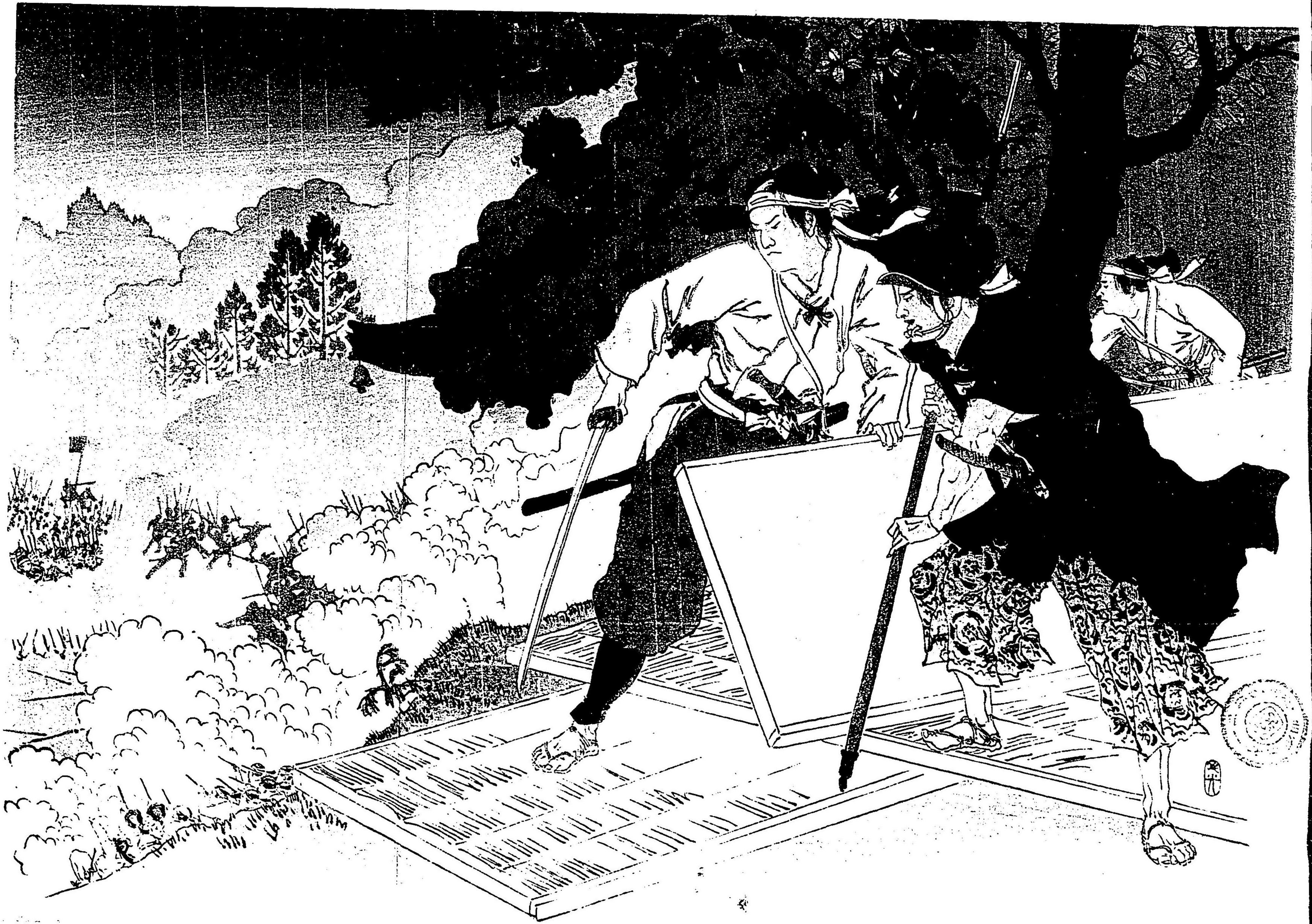
言戦

五五幕

山本
山本
山本

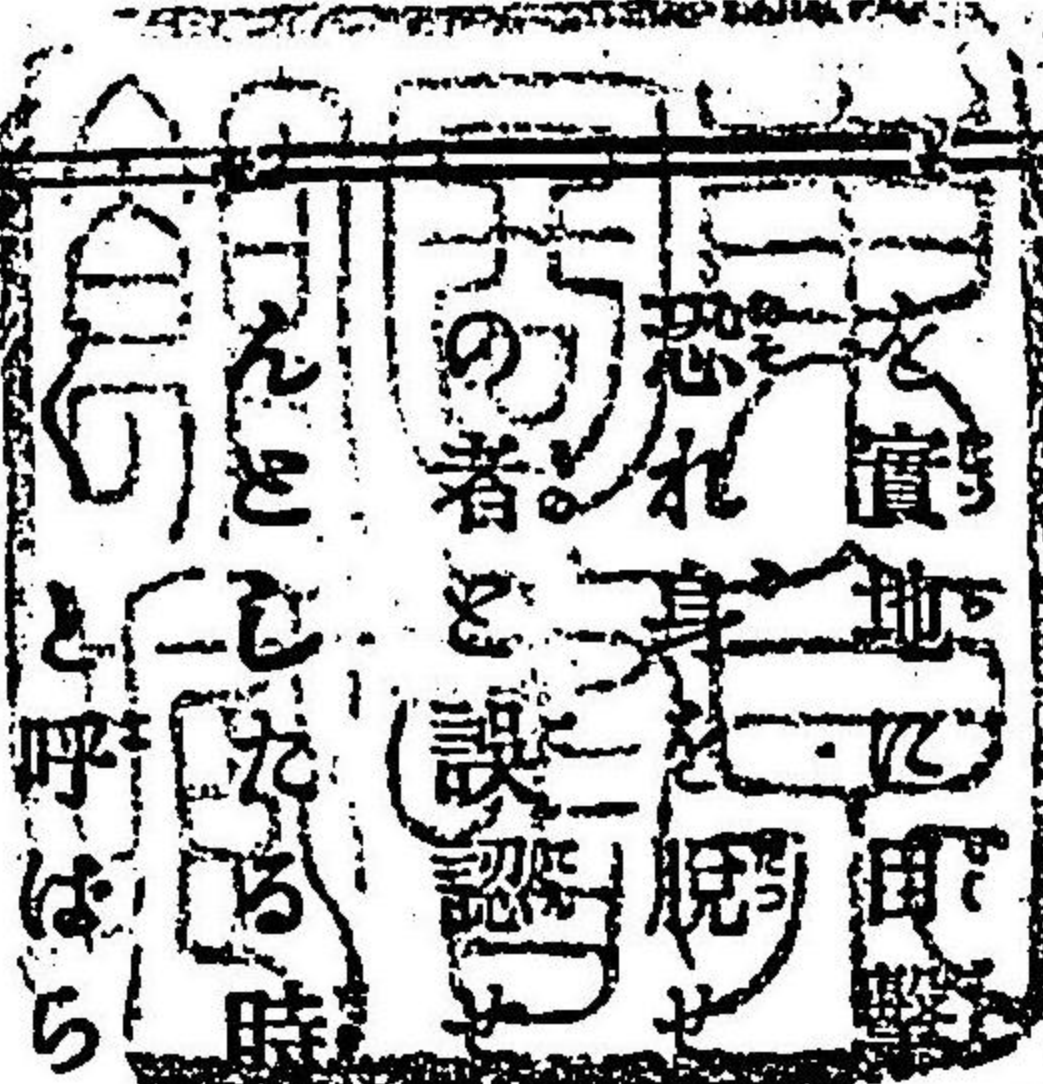
山本





自叙

燕林の本書を編するに當りましては充分探究を致しました
 元下谷池の端に生まれましたる故現に劍閃き玉飛びたる修羅
 を實地に用いたるのみならず炮煙の襲ふを見て心中大
 恐れ身を脱せんと廣小路に出つるや官軍の爲に彰義隊脱走
 の者と誤認せられ其奴縛はれと号令の下に將に天網躍ら
 んとしたる時中に燕林を知る人ありて其奴は講釋師だ放せ
 と呼ばられヤツとの事を脱出した位夫れは又平定後越
 前屋若しくは榊原先生其他關係の人々を就て充分聞取まし
 た事もムリます故事實の上に於ては他より容喙せらるゝる



きも素より文盲の燕林ゆる人名地名杯は時に或ハ呼音は同
 じきも適用の文字は多少相違もあらん幸ひ御愛讀の諸君
 御酌量あらんことを謹んで希望す

明治二十七年甲午彌生の曇天金龍山麓螢居

桃川 燕林誌

○上野合戦

目次

- 第一席 東台戦争起因顛末
- 第二席 輪王寺宮慶喜の爲に哀を總督本營に乞ふ
- 第三席 交渉破裂して幕府和戦を慈眼堂に占ふ
- 第四席 執頭覺王院佛旨を矯て幕府を助く
- 第五席 慶喜中堂前より謹慎を誓ひ水戸を退去す
- 第六席 執頭覺王院氣餒を吐て官軍の將校を還込む
- 第七席 江戸市中殺氣充滿刀槍爲に躍る
- 第八席 白晝劍飛び槍躍り庶人大に畏懼す
- 第九席 彰義隊東叡山内より大に兵を練る
- 第十席 彰義隊官軍傳令使を山下に拒す
- 第十席 彰義隊軍令を嚴布して士卒の暴戾を檢束す

第拾二席
第拾三席
第拾四席
第拾五席
第拾六席
第拾七席
第拾八席
第拾九席
第二拾席
第廿一席
第廿二席
第廿三席
第廿四席

機敏の商主天王寺に禱時歌を三誦す
官使東叡山内を執頭覺王院と舌戦す
彰義隊士卒を部署し出師の方面を決定す
大久保權右衛門宗家を幕府補助と懇通す
彰義隊山下を官軍の兵器を強奪す
柳原式部太夫歌骨處決を苦む
式部太夫彰義隊同盟の密臣を待遇す
兩軍接戦鼓噪咄嗟天地爲る鳴動す
土肥薩並大垣の官兵大奮取還勵す
彰義隊一敗輪王寺宮三河島村に出奔す
官軍兵を分ちて大輪王寺宮を捜査す
輪王寺宮三河島村を具辛苦を嘗む
農夫身を挺で輪王寺宮を庇護す

第廿五席
第廿六席
第廿七席
第廿八席
第廿九席
第三十席
第卅一席
第卅二席
第卅三席
第卅四席
第卅五席
第卅六席
第卅七席

越前屋佐兵衛東都男兒の心腹を顯す
跼天躡地輪王寺宮大居所を苦む
越前屋佐兵衛万丈の氣餒を吐く
輪王寺宮愈よ居所を苦み三たび其歩を轉す
淨門院の機敏殆んど人意の表に出づ
佐兵衛輪王寺の密旨を奉して野州を赴く
佐兵衛の鉄腸行路難を排して微行す
驛吏佐兵衛の爲に私に便宜を與ふ
佐兵衛一喝惡漢爲に改悛す
僻土の農夫佐兵衛の義俠を感勵す
佐兵衛使命を全ふして江戸を歸る
高野大五郎輪王寺宮の爲に身を危ふす
大五郎回腸盤に腹本提督と交渉す

第卅八席 俠商輪王寺宮の爲は皮肉の化病をさす
 第卅九席 輪王寺宮町醫も粉装して越前堀も微行す
 第四十席 俠商大も化病の爲も苦む
 第四十一席 輪王寺宮品濃長鯨艦も脱走す
 第四十二席 硬漢の農夫輪王寺宮の爲も家宅を捜査せらる
 第四十三席 農夫拷問鞭撻も逢ひ身体爲に碎く
 第四十四席 公明の將校能く硬漢農夫の心中を酌量す
 第四十五席 輪王寺宮品濃を出奔平瀨も上陸す
 第四十六席 輪王寺宮會津若松城も入る
 第四十七席 東都の惨状を聞き輪王寺宮前後策を謀す
 第四十八席 高野大五郎越前屋佐兵衛に江東番場も邂逅す
 第四十九席 兩人便船を得て奥羽も入る
 第五十席 官軍總進軍一舉して若松城を扳んとす

第五十一席 官軍の參謀長板垣退助大島圭介を壬生も破る
 第五十二席 大島圭介板垣退助の宏量に一盃三嘆殆んど泣く
 第五十三席 圭介出奔若松城に投す
 第五十四席 上杉若狭守單身若松城も入つて順逆の利害を説く
 第五十五席 若狭守雄辯以て肥後守父子の迷夢を投破す
 第五十六席 若松城門を開き降服謹愼を表す
 第五十七席 輪王寺宮仙台にて總督本營に降る
 第五十八席 隨身の陪臣四散五岐其跡を止めず
 第五十九席 山路も舊主僕邂逅奇縁も驚き舊恩を報す
 第六十席 輪王寺宮隨身細素も紀念を贈る
 第六十一席 四面楚歌輪王寺宮有異轉變も泣く
 第六十二席 輪王寺宮俘囚の身もあり東都に護送せらる
 第六十三席 俠商後難を恐れて遠く浪華に隠る

463

上野合戦

上野合戦

第一席

京都 桃川燕林手記

當時の實況をも熟聴致し其結果實は食を忘れ臆を懼まし
 年湯屋を致し屋号を越前屋と申しました塚谷佐兵衛氏を叩き
 原健吉先生にも克く戦争の起因類未等を聞き又下谷竹町に永
 が戦争の前後に或る仁と就て取調も致し殊より有名の剣客柳
 山内も出入を致し三十六坊の内寒松院明王院を初め諸坊へ
 の者が聊かなる事を骨子とあし妄説虚談を講じまする仁も
 申上り合演しまする東台戦争實記は是まで同業二三
 席

第六十四席
第六十五席

舊友浪華と邂逅して一室を團欒す
 附菅領遺難の庶民を匿開の本邸に受應す
 輪王寺宮北白川宮と改姓親王一品を叙せらる

六

目次終

上野谷戦

書綴りました講談で世評の所謂桃川森林講談百種中の尤物に
敵へられて居ります位で此東台戦争の起因と申すは何も上野
の輪王寺の宮殿を焼く今日北白川殿下で居らせられますが
謂れなく東台に砲聲を聞く思召の宮殿に於ても居りません又
彰義隊と唱へ徳川幕府の忠臣も徒に錦旗へ砲發する等も無い
ません是りや全く物の手違ひから府内に砲聲を聞き道路に生
首を見る機ありましましたもので恐乍ら徳川十五代の將軍
慶喜公戊辰の正月上京を遊ばし参内の上大政返上をあし伏見
までお引上り相成ると會津桑名の兵のみ慶喜公を警護して居
る内端なく薩長士肥の兵と拮つ開戦をあし其時慶喜公は其危
難を脱れ船にて伊弉城に相成りましたが江戸城へは入らずして
直に東叡山寛永寺中春淨院へ伊弉院遊ばし伊弉侯中既朝敵
乱賊の名義にて有栖川殿下を大総督として朝敵征討の爲め江

上野合戦

戸表へお乗込み相成るとのことと既し駿州の府中只今の靜
岡まで下向り相成り駿府の城内に有栖川殿下は伊弉士卒を
指揮して西郷吉之助參謀長が大村益次郎大監察又は中村半次
郎此仁は後西郷氏と俱に叛旗を鹿兒島に翻し城山の露と消
ました桐野利秋の前名でムリます、ナ關東にては此事を聞て
江戸府内の者ハ周章狼狽は目も當られぬ有様でムいしました又
慶喜公は偏し其辭をお聞取りあり胸を痛め覺王院大僧都義
親の手引にて輪王寺の宮へ伊弉調の上此度の難を扱を願われ
たる慶喜公の望は朝敵とてふ名義を削り玉なる事と官軍江戸
府内へ伊弉進軍中止の義お扱を只管に宮家の伊弉法衣のお袖と繩
ッて願われしました其時慶喜公が宮様へ伊弉進物となりましたは
鶴の一節と申す花瓶では是は東山義政公の伊弉愛器であつたと申
すことで宮家がお茶をお好みに相成ると云ふことを存じて居

上野合戦

りまするから伊進物よりなりました者でムりまじよふ然るより
の茶器ハ其儘か戻しより何の仰せもあくか奥へか入りよ
りし故慶喜公は是ハか扱ひ伊迷惑の余りよ何の伊沙汰もあ
事であるふ特よか慰みよ献上をした茶器さい伊受納あき上は
モ一願ふべき所でない心得伊内佛の浄門院殿へか臥を告げ
宜しく宮家へか辞のあらんことを願み慶喜公は春浄院へお
戻りよあり悉く落膽して居らせられた然る所へ夜分御執
雷覺王院内々慶喜公にか目通りを願われ早速お逢いよある近
侍の人を遣け 慶喜公は覺王院よは夜中何と思つて参られたか
慶喜公今日は宮家御面調の御將軍家よハ御不満足よてか歸りよ
相成りなしたる様拙僧はか見受申しました 慶喜公も其砌は造
退の谷まる所宮よは此度の接待御迷惑と見へ鹿品を献上致し
たるよ夫れをも御受納あく又何のか言葉もなくか立入にあり

上野合戦

しは最早天下の人よ捨てられし慶喜代は棄てねども世に棄ら
れし今日の身の上宮よもか見限りよありしかと怨はせねど只
世の味なき事を今考へて居る所じや 慶喜公左様な事もあらふど
存じ實は宮家の御内命を申傳へんがため罷出ました 慶喜公
の御内命とは何事あるや 慶喜公先刻御持参よなりし徳の一節と
申す名器夫れを以て此度のか扱ひを願われたのでは賄賂を以
て事をなしたる様世の人口も如何又名器を得たる故よ個様あ
大事を神旋せしとあらば宮よも悉く御心苦しく思召され依て
何の返答もせず大奥へ御立入よ相成つたる次第御内命と申す
は餘の義よあらす明日早朝東台を御出立に相成り駿府表へ御
出の上有栖川殿下とは御知己と申し殊よ御同族の事あれば
て御交際も厚く候上是非將軍家お望の點を御懇願申すべき思
召よて旅僧の粉装江戸表府内目立ぬよふに御出立尤もか供は

上野谷戦

淨門院淨應院と執僧外下野國大平山徳淨院と御滞在あり居られし慈雲律師と以上四人よて明日御出立と相成る故此戦を申述べんと存じ罷出ました下承り慶喜公の暫く頭を下げ胸中に聊かハ怨みも申上げし宮家の御厚意何を以てか謝せんと心腹を碎き只此上ハ宮家の御扱ひにて事の圓滑あらん事を只管冀望遊ばす此方ハ四人の僧侶を供と召連れられ慶應の四年二月の中旬東台の雲を後見おし駿府表へ御乗込み有栖川殿下ハ御面會の一席

第二席

輪王寺の宮初め五人の僧侶ハ目立ぬ様お扮裝よて日よ歩み夜よ泊り日を重ねて駿州府中の驛へお着よ相成り直様御城内へ御越し遊ばされ然るよ二九内ハ左手よ大村益次郎の指揮する二大隊余も右手よ大監察中村半次郎の指揮する是又二大隊余

王野谷戦

方の兵士嚴重の整列をなす其中央を御通りと相成る此時覺王院大音を下げ覺如何よ此の所ろへ御出よ相成りし御方ハ上野東叡山寛永寺門主輪王寺の宮公現一品宮よて渡たさせられ悉なくも當天子の御血統あり然るに兵士等敢て敬禮を致さるハ宮を輕蔑するよ當る語で敬禮致すべし下馬り上ぐれば大村益次郎中村半次郎俄よ部下よ副令を下し兵士を初め各將校よ至るまで一同茲よ敬禮を致しよした堂も擡出る者ハ目指る者で覺王院が此時官軍へ一本刺したのが幾分か官軍の方も殘念よ思つたものと見へて慶應の四年十月の十日奥州仙台開門山仙臺院よ於て輪王寺の宮ハ有栖川總督へ對し御降服遊ばされるよ共に覺王院初め一同降參を致され其時江戸表へ宮家と初め御越しよ相成るのよ只官軍よて警誼するのみ殊更よ宮家は常の御道中の如く又一人として後問しよ委よて降りし者は

上野谷戦

さい中々覺王院一人は綱乗物にて江戸表へ陸送せられ直々傳
馬町伊半内へ下され其内は伊半内にて熱氣とか申して大分重
病となりましたのを少々の伊縁で本郷登殿坂又屋敷のあつ
た七千石天下の旗元松平美作守殿より願ひ其屋敷へ引取られ
ました今日で云ふと保釋の様者で逐々美作守殿の邸内で病
死致されましたが未だ罪の赦さる内でもいいますから死体の義
は千住小塚ッ原回向院下屋敷へ投込同様又葬りました翌年に
なつて一同赦免せらるるの際初めて東叡山に於て春淨院殿が
施主よりあり天台の僧侶恐く五百人余り會して盛ある法會を營
みました事がういます是は前申上た通り駿府城内で怒じ官軍
を遣込めたのが幾分か覺王院殿の身より不利益を及ぼしたもの
と見へましたサア是は後々申上ます事を一寸前言致して置き
ますが其内伊半内は建れて駿府城内番院へ伊半内坐し相成り伊

上野谷戦

同道の僧侶は次の間々差置かれ茲で有栖川殿下より面謁をお
送り遊ばされ併し伊半内は堂云ふ事を伊意遊ばすことやら雲
上に住む伊方の伊意は小生如きが知る筈もあく愛顧の諸君よ
宜しく十分の伊推察を願ひます併し物を頼みに行くのも俄然
其事成就て何でも斯して呉れと頼むのは俗々申す級下手で物
馴れた人は先づ其主眼の用を跡にして世の中の事を話したり
相撲は堂だとか芝居は何所が面白いか丸で方角違ひの話を
して居る内は先方の様子を見て主眼の事を初めて頼みもすれ
ば又約束もする杯と云ふのが話上手扱ひ上手とでも申しまし
よふか宮家は別な話上手と云ふではいけません万端又達し
て居らつしやる聖徳の君なり殊に覺王院其他の者と協議の上
と見へ只久々よて殿下と面謁されたる喜びを述べたり又九重
の帝都昨今の有様を聴いたりして打解けてお物語り又相成り

上野合戦

ました然るも次の間には覺王院淨門院淨應院慈雲律師の四僧
が聲高く初は今日の有様を物語りをして居られしが覺王院の
至として徳川十五代に至り今日の悲境實は慨歎の極なれども
元祖徳川家康の功勞十全の君を守護し克く民を治めたる通時
の名將ありと云へば淨應院は併し又二代の秀忠は斯々云ふ功
績があつたと云へば淨門院は併し三代の家光は又勇あり智あ
り克く危きの天下を統轄したるは通時と云へばイヤ四代は個
人功績を交るく物語るのは俗に申と壁訴訟で直接は願ひ
すとも徳川十五代の事を切り居る夫れが有栖川殿下の
御聴もも達し聊か是不憚の思召あられる御様子を見届よ
りしものと見へて輪王寺の宮は御言葉を改めて初めて徳川
喜の望る朝敵と云名義解除の件と官軍江戸府内へ進軍中止

上野合戦

の件を懇々御哀願相成りまする茲が東台と砲聲を聞くの一
原因とあるのお話にて委細は次席より着々歩を進めて申上
す

第三席

兩殿下のお物語りも聞よあり稍御哀願の件も中ば御承諾も
相成る所へ有栖川殿下の御前へ一人の従者來り侍恐乍らほ
軍報を上申し奉ります 殿何事じや侍只今甲斐國勝沼に於
て徳川の脱士近藤勇と申す者無智昧の農民を煽動し脱士の
者大略二百人余り官軍に抗敵し集軍すること夥しく容易から
ざる不穩の有様なり委しくは後報に上申致すべくト申上げて
去此時有栖川殿下満面朱を濫ぎ玉ひ殿輪王寺の宮より徳
川慶喜今日謹身致しありと克く辯護すと云へど今聞かると通
りの次第慶喜の表に謹身を装ひ其實官軍の旗を衝き一舉手以

上野合戦

て恢復を企てんとする陰謀あるに相違なし此上の宮如何に
扱ひ玉ふども其義の承引致しがたく重ねて復言棄を授けるこ
と勿れ十斷言して其儘奥殿へ入り玉ふ跡に輪王寺の宮の思ひ
す伊衣の袖を涙に濡し玉ひ嗚呼不憫なり慶喜今日の身上予も
是まで辯護せし折悪く甲斐國より來りし軍報實に慶喜の覺
へあきなれども殿下の慶喜に陰謀ありと思召さるゝも時節
柄是又決して無理ならぬことありと伊藤の折か次は叩ひし
四人の僧侶等も是まで宮御扱ひに相成りし事の到らざるに
是又天命よしして如何せん此上の東台へ伊藤山遊されて然るべ
し下野王院の御勤め然らばとて別段有栖川殿下に伊藤も告
げず其儘よしして江戸表へ伊藤歸國に相成り東台へ伊藤直探覺王
院を以て徳川慶喜へ伊藤扱ひの届かざる趣を以て伊藤答辯に相成
りせし其時の慶喜公も誠し其伊藤高意を謝し歸有の存すれど

上野合戦

も最早朝敵の名義を解くの経術あり只夫れをのみ愛ひて朝
も進まざる位然るに山内よて三十六坊の方々も其心二ツよ
り一方は龍王院殿を始め三十余坊の僧侶に此上は徳川慶喜公
に袖を別て一時も早く京都へ伊藤歸京あらざれば今も何様の
掃事出來するも計り知れず万一宮伊藤身体に聊かなりと雖も災
のある時の此上もなき大事ありとて只管に伊藤歸京を促す又覺
王院執當初め十有余坊の僧侶は徳川十五代の今日まで克く宮
家を守護し奉りし其功勞莫大あるに今十五代よしして徳川の例
れんとするを見捨て伊藤歸京遊ばざるに僧侶の本分よあらす
但俗も出家は人を助けるに云ふ法言のある位然らば伊藤歸京
の義は宜しからず飽く迄も慶喜公を助けて再び徳川の恢復を
致さんと喋々紛々論難するが故に山内の議論も殆ど硬軟兩派
よ別れ決せざる所へ宮の特命にて明日慈眼堂に於て山内の僧

上野合戦

侶を集め元三大師の百番の御厨を振つて其一本去就を決し
吉の御厨出る時ハ飽までも東台と踏止まり又凶の御厨の出
しをば迷に都へ御厨京と相成るの約束を堅くあし當日御厨を
振るの役ハ御執當覺王院大僧都義親と定め一山へ該報告を
したるが故ハ慶應の四年四月の二日僧侶何れも法衣の袖を組
み慈眼堂と會合する中ハ朱の法衣の上ハ白布の襷をかけ謹で
御厨の箱を守護する人は覺王院なり宮家御名代として淨門院
伊出頭と相成り又徳川慶喜公御名代として山岡鐵太郎勝安房
守池田大隅守武中丹後守小田井藏太菅沼三五郎中條金之助大
久保權左衛門澁澤誠一郎榊原健吉天野八郎等を始め三十四人
手ハ汗を握り此御厨万一凶の出る時は慶喜公初め徳川氏一
派の落膽極りもあつて懼れ大小の神應納受あつて吉の御厨を現
し玉へと片塵呑んで抑へたり开も此御厨ハ凶か吉が次席を待

上野合戦

第四席

慈眼堂にハ數名の僧侶殊ハ徳川の侍各々手ハ汗を握り息をこ
めて御厨を振出すを相待つ此時覺王院僧都ハ三寶の上より
し御厨の箱を推戴し暫くの間打振りしが箱あつて振出す此時
目早く御厨の先きを見るハ凶と云ふ文字が現れたるを見る
より手早く中より差入れ大音ハ覺方々見らるゝ通り第一番大
吉あり依て宮家ハ當山と御止りあつて然るべし下呼ハハ
ける時龍王院進み出て龍如何ハ僧都何故左様我儘の御厨を
振られしが何故公衆の面前へ振出さず自身ハ御厨を收め大吉
りどの何事あるぞ我違見するハ一百番にして凶あり夫れを吉
ありと申し當山ハ宮家を止め奉らんとするハ何事ぞ如何あれ
ハ明かハ御厨は振り玉ハずや覺申されハ龍王院荷くも當山執

上野谷戦

當の拙僧へ對し我儘の圖をい何事ぞ吾儘も認むるも第一番
して大吉あり夫れを遠見をするも凶ありとい何事ぞ吾一身に
引受け大切にして圖を振るを外見して是を破らんと欲するは
如何も僧侶の本分もあらうと雖も一官の下に龍王院を確
め御名代淨門院へ對し第一番の言ある旨を宮家へ上申致され
んことを急がれたり此時勝安房守山岡鉄太郎等の御側もあつ
て是れ凶と認めしものを僧都の御情を以て吉なりとあし輪王
寺の宮を止め置かれるその御配屬悉くしと列座の志士一同
も落涙を致される其内會合の僧侶は己れくの坊も戻る勝山
岡の兩氏は右の由を慶喜公へ申し上げたる時慶喜公も僧都の
厚意を喜ばせられ雷山内も宮家の止まりと定まりなば是を後
楯として恢復すべきの時機を待ち玉はんと、見るも慶喜公
も伊心中の輪王寺の宮夫れすらの思召あらば日あらう朝敵

上野谷戦

の名義の取消さるるものと伊心の内へ伊喜びあらせられたる
位茲も淨門院の伊圖の次第を宮家へ上申致す其時又宮の伊一
言凶の吉へ復ると伊言葉のありしに將も凶の伊圖を吉に復ら
しめたる慶王院の心中を克く伊存じ居らせられたるものと見
へ左れば宮家東台も伊止まりも就て初めて宮警衛として彰義
隊と云ふ隊名を作り有栖川總督殿下へ届出でたのは彰義隊八
百三十六人と申すのが表面伊届の人員で其實諸藩の有志天下
の旗本三河以來の人々は是も同盟し隊を分つと云へど其實精
神の何れも慶喜公の再び世も出でん事を祈り又輪王寺の宮を
大切も守護致し茲に其日を送られし所俄も有栖川總督の指令
として徳川慶喜常陸國茨城郡水戸表へ謹慎仰付られ候に付道
中警衛として大村益次郎中村半次郎初め薩州一番隊二番隊を
上野山内へ繰込み茲も慶喜公の輪王寺の宮と涙の伊拙を分ち

上野合戦

伊出發よ相成ると云ふの一席

第五席

時ハ慶應の四年四月の十一日今日いよく慶喜公茨城表へ伊
出立よ相成るの當日上野中堂前より本坊前まで一大隊の兵を
引き參謀長大村益次郎中村半次郎の二氏薩州の一帯隊々長早
川四長兵衛二番隊々長小池隼太等以下何れも是へ整列慶喜公
より春淨院前より荒蕪を布き其上より坐しお姿の良のか衣類は一
重帯々剣を廢され左のか手より水晶の珠を携へか髪は御隠身
中おれば延び御寢れ遊ばしたる御様子後に池田大隈守竹中丹
後守山岡鉄太郎勝安房守小田井藏太春日三右衛門伴紋右衛門
近藤武雄菅沼三五郎川上善藏杉山佐左衛門新居庄太郎大塚覺
之進流澤誠一郎春日半五郎中條金之助大久保權右衛門榊原健
吉天野八郎等の面々其外か醫者か小姓等其後より付添ひ此時大

上野谷戦

村益次郎進み出て大如何も徳川慶喜此度は總督よりの台命
によつて常陸國茨城の郡水戸城へ盤居仰付られしと就て召連
れる同勢何程あるか承り度慶何事も勝安房へか尋ね下され
たい大勝安房と申する者何れもあるか是へ出られい勝伊
尋よ相成りし安房と申するもの拙者事よ伊座ります大只今
慶喜よ相尋ねしよ人数の多少も知らず何事も其方の預る所と
申すが人数何程召連れるや勝其義は拙者外より山岡鉄太郎と
侍二人醫者一人小姓二人則ち是までよムりまする下聞て大村
益次郎實は胸中よか驚きおされたのは愈よ水戸表へ隠身とて
も聞けば必ず旗本御家人が幾分か官軍へ手向でもするかと云
ふか疑があるから多人数を引いたので然る所へ三人や五人の
者が謹でお出ささると見れば反て多人数を引た方が取入位で
ムり升大尙外より申出る事ハあいか勝御尋よ預り添さふ存

上野合戦

じます。茲に御届申置くの同道致する者三四人も過すと雖も徳川旗本御家人其外も出入町人共せめて新宿船渡場まで見送り致度との願ひ此義許し下し置れれば難有仕合も存じます。大「其見送りの人数とあらば差許すが大略何の位な人数であらふか。勝「誠にも聊かでもります。大「聊かど申して何の位であらふ。勝「左れば三万人以内と存じます。余り聊かでもあいが一旦見送りの者の許すと云つたか言葉がある故今更人数が多いからあらんとも云ひ兼ねて此義の許しをいたしました。此時片側は中村半次郎進み出で勝安房も向ひ中「改めて相尋ねるが輪王寺宮守護彰義隊と申するもの、其人数何程あるや。勝「總督まで御届置候人数八百三十六人であります。中「是は何者が支配するか。勝「竹中丹後守、池田大隅守、兩人にて支配をなし又人数を甲乙に分け甲の取締を致候者の、勝澤誠一郎乙の取締を致し

上野合戦

候者の天野八郎、兩人にて嚴重に取締仕ます。中「勝澤、天野と申する者を是へ一言葉の下に勝澤誠一郎、天野八郎進み出で、中「勝澤、天野と申する者の、其方共のことなるか。勝「天「ハハ……中「改めて申入れるの、今日まで汝等徳川慶喜の命も依て輪王寺の宮を守護をなしたる彰義隊なり、今日より、總督よりの命もよつて申付ける彰義隊を、一層嚴重に取締方致すべし。天「仰付られし赴委細長り奉ります。中「左あらば今日より、官軍あり依て錦切れを興へる。下知の下よ一番隊々長早川四郎兵衛肩印の錦切れを、兩人の肩へかけやうとするを、例も見て居た徳川の志士の胸中大に怒り、速に彼が錦切れを受けおれ、飛掛つて斬つて呉んと、榊原健吉、近藤武雄等を初め、他の人々、既にまイヤ抜ひたる有様。勝澤、天野も此上如何致さんと大に困じ果てたる有様あり。

上野谷戦

既^も早^も川^も四^も郎^も兵^も衛^もの^も遊^も澤^も天^も野^もの^も用^も人^も又^も錦^も切^もれ^もを^も掛^もけ^もん^もと^もす^も
 時^も天^も先^もづ^も暫^もく^もお^も待^も下^もし^も置^もか^もれ^も度^も我^も々^も共^も身^も体^もの^も禰^も乍^もら^も上^も野^も輪^も
 王^も寺^もの^も宮^もに^も任^もせ^も奉^もる^もこ^もと^もあ^もれ^もば^も仮^も令^も錦^も切^もれ^もを^も玉^もの^もれ^もと^も申^もし^も
 て^もも^も一^も應^も宮^もに^も伺^もひ^もま^もし^もた^もる^も上^も頂^も戴^も致^も度^も早^も然^もら^もば^も宮^もへ^も拙^も者^もよ^も
 り^も伊^も照^も會^も申^もす^もで^もあ^もら^もふ^も遊^も別^もに^も本^も坊^もへ^も伊^も出^もに^も相^も成^もり^も宮^も家^もへ^も御^も
 照^も會^もあ^もく^もと^もも^も夫^もが^も爲^もに^も伊^も名^も代^も覺^も王^も院^も殿^も彼^も又^も伊^も扣^もて^も相^も成^もれ^もば^も何^も
 卒^も彼^もの^も伊^も方^もに^も伊^も尋^もね^もに^も預^もり^もた^もい^も下^も遊^も澤^も天^も野^もの^も一^も言^もに^も早^も川^も四^も郎^も
 兵^も衛^もの^も向^もふ^もを^も駈^もと^も見^もる^もよ^も朱^もの^も法^も衣^もを^も着^も用^もし^も燕^も尾^もの^も頭^も巾^もを^も戴^もき^も
 水^も品^もの^も珠^も數^もを^も左^もの^も手^もに^も掛^もけ^も右^もに^も中^も啓^もを^も携^もへ^も將^も几^もに^も掛^もつ^もて^も扣^もへ^も
 ら^もれ^もし^もの^も東^も叡^も山^も寛^も永^も寺^も伊^も執^も當^も覺^も王^も院^も大^も僧^も都^も義^も親^もあ^もり^も早^も川^もの^も腹^も
 卷^もを^も着^も用^もし^も大^も太^も刀^もを^も背^も負^もひ^も甲^も手^も懸^も當^も身^もを^も堅^もめ^も武^も者^も草^も鞋^もを^も履^も
 め^もし^もく^も履^もの^も荒^も々^もし^もき^も有^も様^もよ^もて^も僧^も都^もの^も前^もに^も立^も上^もり^も早^も如何^もに^も宮^も

上野谷戦

の^も名^も代^も覺^も王^も院^もと^も申^もす^もの^も其^も方^もか^も覺^も臥^もれ^も上^も野^も輪^も王^も寺^もの^も宮^も伊^も名^も代^も
 拙^も僧^もの^も前^もに^も太^も刀^もを^も横^もた^もへ^も甲^も冑^もに^も身^もを^も堅^もめ^も其^も上^も何^もの^も説^もき^もも^も及^も
 ば^もず^も如^も何^もに^も田^も舎^も武^も士^もと^もい^も云^もい^もな^もが^もら^も失^も敬^も極^もま^もる^も有^も様^も目^も通^もり^もあ^も
 ら^もん^も下^もが^もれ^も下^も一^も言^も四^も郎^も兵^も衛^も烈^も火^もの^も如^もく^もよ^も相^も成^もり^も早^も臥^もれ^も坊^も主^も
 我^も々^もが^も軍^も服^もを^も着^も用^もし^もた^もの^もが^も何^もの^も不^も禮^もじ^もや^も開^もも^も我^も々^もの^も軍^も人^もあ^もる^も
 を^も知^もら^もざる^もか^も此^も度^も徳^も川^も慶^も喜^も朝^も敵^もと^もあ^もつ^もて^も常^も陸^も國^も水^も戸^も表^もへ^も差^も送^も
 る^も夫^もれ^もを^も警^も護^もす^もる^も我^も々^もの^も軍^も服^もを^も着^も用^もし^もた^もの^もが^も何^もが^も不^も禮^もじ^もや^も爲^も
 假^も令^も徳^も川^も慶^も喜^も今^も日^も朝^も敵^もの^も名^も稱^もを^も得^もる^もと^も云^もへ^もば^も輪^も王^も寺^もの^も宮^もに^も
 何^もの^も伊^も不^も審^もが^もあ^もる^もサ^も伊^も不^も審^もの^もあ^もき^も宮^もの^も在^もす^も所^もを^も何^もと^もす^もる^も此^も所^も
 は^も武^も藏^も國^も豊^も島^も郡^も羽^もヶ^も田^も莊^も上^も野^も村^もと^も申^もし^も輪^も王^も寺^もの^も宮^もの^も居^もす^もが^も故^も
 に^も之^もを^も河^も原^も伊^も所^も河^も原^も伊^も殿^もと^も唱^もへ^も京^も都^も營^も中^もも^も同^もじ^も又^も拙^も僧^もは^も荷^も
 も^も今^も日^も宮^もの^も伊^も名^も代^もた^もれ^もば^も相^も當^もの^も禮^もを^もあ^もし^もて^もも^も然^もる^もべ^もく^もよ^も物^もを^も
 知^もら^もざる^も田^も舎^も武^も士^も目^も通^もり^もな^もら^もん^も下^もれ^も下^も一^も言^も伏^もせ^もら^もれ^も四^も郎^も兵^も衛^もは^も

上野谷戦

短氣を仁故既よ脊背ひし太刀の柄も手を握る有様大監中
村半次郎駆来て早川を制し覺王院へ一應の挨拶をなし此時早
川は怒れども重役の制しよ止むを得ず自分の隊へ引取りまし
たヌルト今日慶喜公上野谷立退きと云ふことが知れたるもの
故下谷近傍根津谷中淺草かけて町人百姓名残りでも申上ぐ
る氣か上野へ来たが丸で人の山をなして慶喜公を拜すべき所
もあき故澤山ある樹木なれば何時か夫れへ登り初め丸で木の
枝は人間の鈴結の隊でふいきました其の人々が慶喜公の浮姿を
拜したり余り數仰々しき官軍を見て快からず思つて居りまし
たる所へ官軍の隊長とも思ふ人が今覺王院殿に道込められて
兵赤よあつて下る様子を見ると一同云ひ爲替した様より……
……と聲を上げました二番隊の隊長小池半太が兵士を指揮し
たものと見へて三十挺計りの玉は込めねど運發よりンンンン

上野合戦

打出されたので木に登つた居た奴は一通もバラバラと
と落ちましたヌルト近所の子供が駆て来て落ちたのを籠へ拾
ひ込みました丸で夫れじや銀杏か椎の實の様だ將かに損事
なふいませんサテ覺王院の返答も彰義隊の者へ錦切れを遣す
の能く宮へ御伺申上げた上總督まで御返答を申上べく由を大
村益次郎へ答へられ茲に慶喜公の急よ御立退し相成るの時
も至りました故覺王院をお招きし相成り慶喜公は是迄の
御配慮に預り満足と思ふ御面謁致すことも耻入る余りに遠慮
致せば貴僧より宮へ好まぬ披露も預りたい覺榮古盛義の世
の習ひの申しさながら御痛ましき今日の有様無かし宮も御心
を痛められん此儘拙僧より上申致すでムらふ此上とも御身
体大切よ又逢ふ春を御待遊ばされ度存じます慶其一言予
も満足致した然らばとて御袖に涙を拭かせらる有様覺王

上野合戦

院も衣の袖を顔へ押當て涙を隠す心の裡如何ばかりでムリま
したるふか鬼斯する内御乗物へ慶喜公を乗せ参らせ徳維の者
澤山付て水戸街道へ御立出相成りました此時でムリます上
野から吾妻橋小梅引船通り新宿の波場まで丸で人で埋りまし
た様で何者か沙汰をしたか此時又江戸町年寄り名主町役人杯
は皆足袋既で出まして往來へ坐つてお通りを拜みました位で
サテ徳川十五代の將軍慶喜公も日あらず茨城郡水戸表へ御着
に相成是は悉く御躰身遊されました此方は彰義隊の者輪王寺
の宮を警護して居ります内に官軍の彰義隊々中の者と平素
より疾視反目呉越の如く茲又端なく兵端を開くと云ふの様
が發動ました該原因は一寸休息して申上ます

第七席

妖雲覆々鬼骸々殺氣ハ江戸市中に充満し三百有余年の間天下

上野合戦

を専制したる徳川幕府の亡滅既又定まる此時彰義隊ハ途々官
軍と接するや洋奴の精粕を嘗めんとするの痴漢と罵れハ官軍
ハ又大義名文を知らざる徳川旗下の奴隸無慮の逆賊木偶武士
と叱咤し寄ると集ると罵詈謗帯びたる秋水抜かん計りの有
様茲又一日榊原健吉氏ハ所用ありて小川町まで参られて戻り
道々神田の明神下玉川と云ふ乾物屋の前へ來ると向ふから官
軍の兵士が十人計り何れも鉄砲を擔ぎ狹き往來を態と並んで
來る様子面倒だから路傍へ避けて通ろうとする擲ひて居た鉄
砲の盛尻を榊原の肩の所へ當てました知らぬ振り反して行過
ぎよふとすると鉄砲を宛てた奴が兵コレ何故往來の邪魔を
する第一保管の筒へ衝突何とも挨拶もせずよ行くのハ不禮な
奴じや甲「萩原止せ見れば徳川の鷹拔侍じやそんな者を相手
にするど反つて當隊の外聞じや萩「イヤハハ鷹拔侍だから一

上野合戦

應云つて聞かせる大地へヤンと兩手を突き謝つて行け 健
是は大きき失禮を致した然らば斯の通り致すから勘辨をして
呉れ下大地へ坐つて兩手を突き頭を下げる 疾未だく損
ことでは勘辨は出来ん地上へ面形を押せ 健承知したが地が
堅いので克参らん是が鎌倉か七里ヶ濱かソノカの様さ砂地で
あつたら鮮明押せるだらふが 甲疾原甚哉君止し玉へ刀の手
前面形が押せん云ふて真劍の勝負でも望む様さ奴あら面白
いが左様を腰抜を相手にして何とするか 疾夫れも曾だヤニ
名前を名乗つて行け左様したら性命は助けて遣すから 健狂
名あら茲に書いたのがあるから是を見て下さい下候中より半
紙へ自分で書かれた名刺で輪王寺の宮守護形義隊々中金虎隊取
締神原健吉下認めたるものを差出す是を取上げた喧嘩の相手
は小石川水戸屋敷跡に居た文字隊の伍長疾原甚哉と云ふ男で

上野合戦

今先生の名刺を見て兵士等互に顔を見合せ 甲如何もお氏家
此名刺は神原健吉とあるが徳川十三代十四代の君へ劍道の指
南をした神原先生ではあるまい 健是はく御存じであられ
し加將軍へ未熟ながら手直を致した健吉と申す愚圖でんる
疾ニツエ…… 然らば其許が神原大先生でムつたか是は意外
の失禮を致した堂々御免も預り度下兵士は一固まりあつて
明神坂の方へ行つて仕舞い先生は袴を着た土を拂ひながら別
れ恥入つたと云ふ様さ顔もしあいで其儘東台へ歸つてお出よ
あり今黒門を這入らふとする向ふから二人の侍ヲ取刀で
駆来り先生を見て立止り 侍先生モ一筆済まなりましたか下
尋ねました二人は神原先生の門人島野伊兵衛關口長十郎と申
して何方も撃劍の達して居ります先生も常々目をかける位の
若者で 圓先生只今山内出入の者の申すよハ神田明神下で先

上野谷戦

生が大勢の兵士を取巻かれ大地を突つて居らつしや
る由を聞きましたが生として五人や八人の者を斬撃よ
るの苦もな事とは存じましたが生は大方は大勢と承り
援致そうと心得罷越ました島定めて斬撃ありました
うさ 樹イヤ 今日飛んだ災難と逢つた自分の方から
砲の台尻を拙者へ宛て置つて色々言掛を申して謝れど
云ふから謝つた又大地へ面形を押せと云ふから押して見たが
堂も甘く呑んかつた 園夫りや先生もお似合ひあさらん兵
士を何故斬つてお仕舞ひあさらん 樹夫れだから否ん貴公達
は只聊かの勇も選つて官軍と見れば馬音殿時依れば傷を
付ける杯狼藉を致す故彰義隊と云へば推做して乱暴人とか
り認められる我々が斯の如く東台止まり護身するも慶喜公
の朝敵の名義を削り徳川回復の望あるもの今聞けば會津表よ

上野谷戦

は肥後守殿父子最早戦争の用意もして開戦も相成つたる由
承知致し又結城下館の邊にも脱士の者戦争を起すは何れも慶
喜公を傷復さしめん出義の志より出づる所然るも府内にて
狼り官軍へ對し抵抗すれば反つて穩かあらざる事として選
よは官家其罪の及ぼす事もあらん夫れを前後の勘辨もあく
官軍へ傷を付けるのを勇者と思ふは怪しからんこと此上ども
深く謹みあさい侍として刀の鞘を拂ふは一大事の時に限る些
々たる事と對して必ず暴行を加わへることは許しません下
先生の一言も兩人反つて閉口を致しました其内先生は入浴に
お出まあつたが何分兩人は年若だけ耐えしか時其日よ
下谷五軒町にて官軍二名を斬倒し茲又騒動近因の種を蒔くと
云ふの一席は

第八席

上野谷戦

島野伊兵衛四口長十郎の兩人は榊原先生より懇々の説諭はさ
れたが何分よも血氣と云ひ殊に榊原四天王の内へも入ろうと
云ふ手練家であるし堂も固兼て斯云ふ時よの忘れる様も酒
でも呑まうと廣小路の鳥八十へ行つて馴染でゐるし互も心
持よく一杯呑んで表へ出たが八ッ少々過ぎ 島野口氏拙者の
筋迄まで用があるが同道してゐ呉れまいか 山内へ戻つた
所が別々用事も無い故御同行しよう 島野は呑み此頃で
官軍の奴等一人で行かんか 團夫りや一人じや歩かん五人
とか十人とか黨を組んで歩いて居るの必竟我々が恐いからだ
島野は榊原の先生も余ッ程穩かになつたな今日の事杯が四
五年前であれば必ず斬つてお歸りなさるだらう 團夫りや申
迄も堂も遅かれ早かれ還るもんだからッロ 道初め度
もんだ下酒の上ありかた 話をしあがら御成街道を今日で

上野谷戦

申す鉄道線路の五軒町の途へ来る内よの官軍も一組に
つて往來するを嶋野四口へ見る度よ彼よしよか是を斬るか
杯と大聲を上げて往來する故町人百姓女子供の膽を冷して往
來をする位丁度五軒町よ常陸屋喜右衛門を申して刀屋がムい
ました其刀屋の前よ山の様お人立ち故兩人の望いて見ると官
軍が五六人中に一人腰を掛て刀を前へ引付て居る亭主の前に
の金子が八九兩並べてある様子何を粗鹿をしたか亭主の切り
よ謝つて居る官軍の兵士の切り威張つて居る様子兩人の
を分けて前へ出で 島野常陸屋何をしたんだ 堂へイ是の堂も
山内の旦那でムいますか別段に悪るい事を致したでムいま
せん此刀でムいます是の關の象重で拵付五十兩と云ふ品で夫
れを此旦那様が一昨日お出よあつて御覽の上十兩負て置けと
仰りましたが五十兩の高で十兩を申す喰違ひで手前共でも

上野合戦

困りますが商賈も暇あり旦那様も是非負て置けど仰りますか
ら左様ならお負け申しますと約束を致しましたスルト今日
お出なまりまして十兩の差山で持つて行くど仰る故僧でんム
いません四十兩でムいませんと申上げました先方様でん十兩
負けたと仰ります手前共の方でん十兩お負け申した事でムい
ますから大層お喰違ひ併し五十兩の物を十兩お負かりそうか
事ハムりませんから堂か御勘辨を願ひますと申してもお隠入
がムいません誠に困つて居ります所で 烏奴隷其方が夫りや
解らん亭主の云ふ通り五十兩の物が十兩お負るか負らぬいか
考へて見る遠國から来て江戸表府内の町人を意地目て歩く
チイ亭主拙者が百兩で買つて遣らふト島野の幸ひ持合せの百
兩を亭主の前へ投出しました亭主も五十兩の物を百兩お買つ
て呉れるコナ好事はあいが何分官軍の兵士が側に居るから

上野谷戦

只モヨクして居りましたスルト官軍の火の玉の機よあつて
怒り 宣扣へろ拙者が價を取極て居る所へ来て此品を買ふど
ハ何だ未だ外澤山あれば外品を買つて行け 烏黙れ外品を
買ふのハ河童の差圖ハ受けんソ 宣河童とハ何じや 烏河童
の機よ姿をして居るから河童と云ふたのが悪るいか是れよく
聴け徳川侍ハ何品を求めらんと云つて負ける杯と云ふ不見
識者者ハ一人もあいら第一刀脇差は侍の表道具いよ 戦場
へ臨めば是を揮つて敵陣へ斬込み勝を示そふとするのは侍の
望む所然るも其刀を買ふのハ負て置けとは何じや侍の負ける
と云ふのは思ひ言葉だ戦場ではナ武者言葉と云つて別段又言
葉を改めるもので早い所が敵の馬は鳴いたと云へ味方の馬
は勇んだと唱へる位侍は言葉又氣を付けるは其所を負けて置
けど云ふは何だ徳川武士は五十兩の物を百兩で買ふのは徳川

上野合戦

風だ下嘲弄を致され今は朋友も居るし引くも引れぬ都合故
己れと云ふと官軍は一刀を引抜く此時早く島野伊兵衛は休を
抜ひた榊原先生の仕込みヤツと云ふ聲諸共官軍の首は常陸
屋の亭主の胸へぶつかかる亭主はアツと云ふと腰が抜ける連れ
の兵士は夫れを見ると其儘として駆け出して逃げて行く往來
の人は八方へ散乱する 國島野通つたナ 島一寸道つた亭主
や是でモ一宜からふ 亭旦那様離ひ事をあさいあした併し勘
定は勘定此金子を隠さまして宜うムいますか 島馬鹿云へ何
所の國も氣でも違ひはしまし五十兩の物を百兩で買ふ奴が
あるものか曾云つたら彼奴が五十兩で買ふたらふと思つたか
ら一寸見せ金をして遣つたのだ金を出せ下百兩の金子を懐中
する亭主は島野の袖を扣へ 亭旦那さん首は空致しましよふ
島首か首は其方よ遣らふ 亭旦那……余り暇き度ムいませんと候

上野合戦

へるのを笑ひあがら島野圓口は東台へ歸る茲も逃歸つた兵士
は此事を參謀長西郷吉之助へ告げる西郷參謀長は總督へ申上
げましたから遂に官軍の外廢刀の命令を下さんとする時早く
も東台より覺王院義親總督の本營に至つて廢刀命令の不當を
堂々辨破すると云ふのお話

第九席

五軒町にて官軍の兵士一名落命を致したるも付残りの者が是
を西郷吉之助へ訴へ西郷參謀長から有栖川總督殿下へ申上げ
て遂に官軍の外廢刀と云ふ事の内決早くも是を東台へ通知
した者があるを見へて覺王院殿自ら百九下總督の御本營に來
り殿下と對顔は致さねと西郷參謀長に面會して廢刀の令を破
りました何で破つたと云ふも其主意は申さば殿下を整備する
兵士は只官軍と云名義あるのみ又上野輪王寺宮を守護する形

上野合戦

義隊とても同じ譯で此理を推て遂に彰義隊は帯刀する事を許されましが仮令か旗本の内でも朝臣もあらず又東台へも入らざる様も人は帯刀をも許さず實は侍の無腰は見苦しいものでふいませ一時は穩かよなつた様ももの、未だく官軍へ對し馬音する者もあれば官軍は又彰義隊を土芥の如く罵るるり茲に幾多の日を重ねて居りました然る所輪王寺の宮より仰出され山内へ於て調練がふりましたが此時は往來止で山内の通行を致させませんから見たものも澤山はふいません小生杯は幸ひ彰義隊の指令使をして居た某が縁者でふりましたから拜見を致さして貰いました池田大隅守大將もあり竹中丹後守入道春山此仁が參謀長にて彰義隊の者を指揮運働をさせましたが坐作進退の正しき夫りやあかくあもので其時取わけ見事でふりましたのは榊原の神木隊で九十六人の人数隊長は

上野谷戦

酒井良助此仁が指揮を致し誠に見事な調練を致されましたは私が拜見したと云ふのを只伊参考まで一寸申上げます也テ其日は調練が終りますると覺王院へ於て伊酒下され何れも酌酌を致し其中吉岡良作坪井又五郎春日半五郎の三人山玉台へ出て酔を醒まし遠く望めば金龍山の五重の塔は雲と錢へ江戸表の三ヶ一を見る位誠な眺望に當んで居る所でふいませ春ノ兩名斯選つて笑つて酒を呑むのもモ一少しの間何時刻の中又砲聲を聴くか知れんナ吉如何にもモ長ひ事はあるやいと拙者は存する坪野は奥羽への戦争が始まつたの會津はモ一城攻め成つて居るのとまちくの取沙汰が其實際を聽たいもんだ一春左れば二本松が合戦最中だと云ふし會津若松の城が落ちた杯と申す噂もある堂も解らん坪夫りや嘘じやまだ中々會津は戦争もあるまい奥羽とても開戦はあらん

上野谷戦

と思ふト話をしあがら見下せば坂本通りを一挺の早稲千住
頼立の人足と見へ七八人の者が付て引くやら押すやら揃ぐや
らエーサエーサッサッサッサッサッサッサッサッサッサッ
りました所上野の方へ急て行くのを目早や見付て 春見玉
へくありや早稲籠た察するも奥羽の戦争か會津の若松が閉
戦にあつた事を總督の元へ注信する奴も相違ないして見ると
彼のものを取押へて様子を開けば開戦の虚言が解る堂だ取
押へてハ 吉至極宜しい我々共屏風坂を下つて三ッ又の所
待つて居て人足へ申付けあひの早稲籠を上野へ連れて來よふ
春ッ一あると善は急げた過がし茶仕方がない、サ行ふと三人が
足袋靴で屏風坂を駆け下り丁度三ッ又も出て三人あがら刀
反を打たせ早稲籠の來るのを待つ向ふへ、エーサッサ、エーサ、エ
ーサッサッサッサッサッサッサッサッサッサッサッサッサッ

上野谷戦

籠の中は如何なる人物が乗るや一寸体息して申上げます
茲に吉岡良作外二名の者共は待つて居る所へ参りました早稲
籠は奥羽の地は開戦となり白川より早稲籠の役も當つた盛州
七番隊の伍長大山五郎次有栖川總督へ開戦の投標を具申する
の役今草坂脇へ來ると早稲籠が止つた様子早稲籠の内から見れ
ば何れも衣平の對羽織を着し髪は顔身中の事ゆえ髪頭も廻び
引撥る様も長刀を差して居るのは云はずと知れた彰義隊の者
は相違ない出れば面倒と思ふ故五郎次は認籠も居る、スルト千
住より至急頼立の人足は三人の侍も往來を止められ 人堂
且那樣御通せあすつて下さいませ 春人足其方共へ別申す
のではある頼籠の中の人足用がある此儘東叡山へ認籠を入れ
る 人私共は西丸下の御本營まで参りますので上野へ行ては

上野谷戦

居られません 吉取れ此方用があるから... 五郎次白布を以て腹を巻き白布の鉢巻をして首に掛けたる有様 蓋我公は見れば官軍も相違ない察するに奥羽の地も開戦とは存ずれど今何所も始りしか大方其注信も總督本營まで行くものであらふ有体も申して貰ひたい 大是は怪しからん一言如何にも軍報使節も相違ないが大切の御用を帯びて影我隊の者は舟追せられ頼りも大事を物隔りする事は相成

上野谷戦

らぬ第一使節の拙者を止めるは總督へ對して恐あることを存じまいか 吉取れ其位の事は存じ居る戦争の損益が酌きたいから呼んだ申す事があるらんと云ふあら其方の願へ掛けた状箱も何か書物があるだらふ其状箱を速く渡せ 大是は怪しからん一言只今申す通り總督殿下へ御注信申す某大切の書類仮令一命を失ふまでも思はる内よか渡し申す事は相成らん畢竟個様ある暴行を致すが故も隨て慶喜殿も其罪を脱する事の能はずるは支障強くして其家を倒すとは足下等の事仮令百言費すと云へど拙者の思はる内は書類は斷してか渡し申すことは相成らん夫れよて不平あらば尋常も勝負を致せ 蓋何を云か此河童奴我々へ對し勝負をせよとは面白い望もあるあら首と胴を放ちして遣らふ下春日半五郎吉岡良作坪井又五郎の三人刀の柄へ手を掛ける大山五郎次も先刻より既に怒氣満面と溢れ心

上野合戦

得たりと屹と身揃ひ是も刀を取直し既よ斯くよと見へたる所
へ中堂の方より汗馬に策ち沙塵を蹴立て、か出よありました
のは天野八郎大音上げて静まれく、と云ふ一言は流石乙の取
締をする丈あつて三人も柄へ掛けたる手を解く内よ馬を乗据
へ、天是は官使へ對し手前からか詫を致す先刻よりの有様を
見るよ實よ忍入り交した次第此者共三人は遠より發狂を致し
て居り升る者故何卒此度の義御内陣の御沙汰を願ひたい、大
左様か言葉があらば此度の義の總督へ上申は致すまい、ソテ其
許は何と申されるか、天某は山内義隆八百三十六人の乙の
部取締を仕る天野八郎と申する者、大段て忍名を承知致して
居る天野氏でふつたか拙者は薩州七番隊伍長大山五郎次と申
す御同前内陣の御沙汰を願ひ度、天か聞許よ相成り添ふく存
じます、ト早速人足へ沙汰を致し大山を控籠入れ是は飛ぶが

上野合戦

如くよ總督御本營へ赴き交した、サテ天野は三人よ示し此度の
暴行實よ甚だしき事だ依て只今より天王寺入處分申付けると
沙汰致しました此天王寺入りと云ふのは是まで官軍へ對して
罷れなく暴行をしたるもの又は疎暴の振舞をあしたる者杯は
山内へは置けませんから曾云ふ人々を入れ置ました、ケレハ牢
とは違ひ交して入口よ張番所がふいまして狼りよ出入は出来
ません三人は取締の言葉よ止むを得ず一人の人が付添ふて谷
中天王寺へ送られ張番所へ来て答へ名前を書留て其儘奥へ行
つて見ると四五人居りました茲よ中條金之助始め錦々武勇
の話をして居る三人も同坐して今日の傳馬町を語つて居りま
す所へ参ぬりましたる町人の話に藤堂家より大砲二門彈藥小
銃等を今日奥州白河へ送ると云ふ事を聞て無分別よも天王寺
よ居合はじたる惣隊二十三入願堂の同勢を支へ大砲を密ん

上野合戦

吉岡良作春日半五郎、坪井又五郎の三人は、取締天野八郎より天王寺入を申付られました。前席も申上げた通り、天王寺へ進入するのは決して罪人ど云ふ譯で、いけません。幾分か影義隊の規則を破つた者が、天王寺へ遣られました。もので、参つて見るに、中條金之助を初め、三四十人居合せました。中條金之助は夫れと見るより、中やあ新入が来た。参謀だ新入なんて云ふのは、誰だ中、拙者じや、吉是、中條先生、中、お前方は何をして来たんだ。え、参、何別よ、悪るい事をした譯じや、あ、い、お少しばかり追つた、中、お話しあせえ、参、物、随りも致すが、先づ各々から先きへ話して貰ひたい、中、夫りや、堂、せ、隊、則を守つて居る者は、天王寺へは来ねえ、彼所へ居る島野や、關口は、河、堂を斬つたんで

上野答戦

此所へ来て居るし、富永氏も何か遠くなすつたつけ、先、月、中、お茶の水の櫻の馬場で、河、堂が三人先きへ立て行きやが、つたから、跡から行つて小便をすつかけて、返つた、ス、ト、怒りやが、つた、中、夫りや、前、當、だ、小便をすつかげられて、黙つて居る奴があるものか、富、河、堂の癖、え、怒つて向つて来たから、一人を神田川へ投り込んで、一人を、毟、倒して肩へ着けてた、錦、切れを取つて、鼻をかんだ、丈、の事だ、中、夫りや、余、ん、ま、り、好、く、ね、え、三人は何だ、ね、下、問、はれた、よ、付、て、早、急、籠、を、上、野、へ、引、張、込、んだ、一條、から天野八郎、え、叱、かられて来た事柄を、笑、ら、ひ、あ、が、ら、話、を、し、を、して居る所へ、参、の、もの、が、駈、けて、来、ま、し、て、参、ユ、イ、中、條、さん、は、居、らつしや、い、ま、す、か、中、居、あ、く、て、何、所、へ、出、ら、れ、る、もの、か、参、是、は、飛、た、事、を、申、し、ま、し、た、只、今、神、田、須、田、町、の、武、藏、屋、熊、藏、と、申、す、者、が、参、り、ま、し、て、お、目、通、り、を、仕、度、と、申、し、ま、す、が、如、何、取、扱、ひ、ま、し、ま、よ

上野谷戦

か 中何熊鷹が来たか是へ通して呉れ 舊左様あらふ通を申
します」ト其儘参りましたが此武藏屋熊鷹と云ふ者は年来中條
の屋敷へ出入を致した伊用達町人で大きな包を担いで天竺居
る所へ歸々挨拶をして中條金之助の前へ頭を下げる 熊
鷹前様は不沙汰を致しました 中條鷹堂して是へ来た 熊鷹
上野から伊前様の上野へ居らつしやるを云ふ事を伺いました
於年來が出入をし伊最負と相成ましたゆゑ一寸と伊見舞かた
く上野へ参りました所が天王寺へ居らつしやるを云ふ故夫
れで参りました 中條出入町人も澤山あつたが斯云ふことよ
あつてから見舞杯よ来る者は一人も無い貴様は人間が狡猾で
馬鹿で怒張つて居るが斯云ふ所は腹心だ 熊鷹前様大抵は遊
ぼして下さいまし馬鹿で怒張つて居ると云ふ事を聞けば澤山
で云ひ升 中條が貴様位強盛な者はねえ轉んでも只起きない

上野谷戦

と云ふのは其方が事だ 熊鷹はじや丸で熊鷹叱られ来たよふ
者だ」ト笑ひながら取出した安宅の松の脂が二桶外も菓子折
を添へて差出す 熊鷹「是は詰らんものでムリですが御前様
が松の脂がお好きで居らしゃいますからお口汚しよ持つて参
りましてムリ升 中條は堂も不願ふ事だお氣でも狂つた
か但しは毒でも遣入つてやしないか」ト云ふ 熊鷹替らさ
御前様の口が悪い居らつしやいます私達で御最負もありま
すりや此位の事な致します又御前様の方でも一人の仕事を休
んだ町人から物を貰つたからと云ふて貰放しよする様を御
前様でムいませせん色々御心配を難有ふ存じます 中條は待て
く モーそろく 始めやがつて其方が申さんでも幾分か運る
積りだ 熊鷹夫りや堂も難有ふ存じます併し此脂の御前様一人
で召上りの致しますまい何れ斯ふして居らつしやる且那方へ

上野合戦

御分配でムいしよふ 中夫れに其積りな 熊登して見ると
茲も居らつしやる御前様方も何故中條様の御配當だからと云
つて黙つて召上る様も御人休のムいません何れも彰義隊で徳
川様の御家来だから堂して氣前がよく居らつしやるから熊
登で仕度でもして行けど仰つて下すつての實も氣の毒様で
ムいませぬ 中アレマ各々仕様のあい殺猪野郎でぢや丸で高
断を賣りよ来たよふあるんだ」笑ひながら中條から金壹兩銘
々から金壹兩二兩の金が手運入ると熊登ニコニコ笑ひかけ
熊堂しても江戸ッ兒であくこの話が解りませぬを官軍だも
んて肩へ錦切を付て居たつて役もや立ちませぬ 中熊登抽者
も久しく此天王寺も居る故町の事知らんが些とハ替つた事
があるか 熊左様で別よ替りました事ハムりませぬが三十六
見付が奇麗よまましたのど女の髪の子が替りましただけ

上野谷戦

の事では 中女の髪杯の堂でもエーが見付が奇麗にあつたその
堂奇麗よあつたんだ此間まで番人は居ず丸で明店同様犬の糞
や馬糞があつて切れた草鞋が積上つて實も思出して涙が出る
様であつたが奇麗にあつたどの何した 熊私も巨問かい事ハ
知りませんが勝安房守様が書面を作つて有栖川様へ願つたの
で俄も手入をするやらか堅めが付くやら元の見付の様よなり
ました 中チー堅めと云つて何所で誰が堅めて居る」熊登よ
話を聞く是が一ツの手違ひよあるの一席

第十二席

中條金之助の膝を進め 中コレ熊登見付の堅めを聞かして呉
れ 熊夫れハ残らずハ覺へてハ居りませんが淺草見付ハ霞ヶ
關の黒田様で筋違見付ハ伊賀の上野の藤堂様で昌平橋ハ登前
小倉の小笠原様がお堅めでムりませぬ槍や鉄砲を裝り付けて前

戦合野上

より余程立派よかりました 中各々聞き玉へ何しても勝氏の子
 才子たる書面を以て總督へ願ひ三十六見付を奮ふ復されたど
 云ふの心持がえい熊鷹何か外も面白く話のなにか
 熊鷹左様で此頃子供達が大きき聲をして流唱歌を謡つて居りま
 す 中馬鹿を申せ子供達の流唱歌が何が面白い 熊鷹夫れが子
 供でも大人でも切りよ運つて居ります 中何と云ふんだ 熊
 鷹一行き官軍歸りの佛 中何行き官軍歸りの佛……伊一
 同か聞きあすつたか 侍承つた何も喜ばしい歌でムらんか
 中此流唱歌杯と云ふ者の物の前表を知らせる者で行き官
 軍歸りの佛と余程面白い熊鷹跡のなにか 熊鷹伊前様跡
 がなほ様じやあんば流唱歌でも歌ふありません 中跡がある
 なら追つて呉れ 熊鷹お話し申しても宜うムいしますが今日
 へ納め物を致しますので其方へ参りませんと一雨逢ひますか

戦合野上

ら何れ當月中も参つて跡をお話し申しませふ 中是れ否の講
 釋師の様も夫な所で切る奴があるものか一兩金遣すから話せ
 熊鷹現金願ひます下云のれて中條金之助の紙入から又一兩
 出して熊鷹へ渡し 中サ夫れで話せ 熊鷹是から直し申上ます
 エ一行き官軍歸りの佛 中底の解つて居る其先きを話せ
 熊鷹アお静よあすつて下さい此所が正根の所で行き官軍歸
 りの佛……底で勝負が……へ……へ左様あら 中待てく 危
 い所で止して仕舞ひやがつて其跡の何を云ふのだ 熊鷹へ一今
 日のお屋敷へ納物を致しまする日 中又始めやがつたサ二
 兩遣るから皆お話しして仕舞へ 熊鷹二兩から獲らす申上ます現
 金でふいますよ 中夫りや遣らア下小判二枚を投り出だせハ
 熊鷹の手早く仕舞ひ詰桶を背負て来た風呂敷で頭へ縛付け
 熊鷹行き官軍歸りの佛…… 中其跡だ 熊鷹底で勝負が……中

上野合戦

士無事に奥羽の地方へ赴く竹中天野の兩人の大勢を連れ再
び天王寺へ歸身を申付け是より山内の規則を一層厳重とし
官軍へ對し魚鱗の振舞をき厳しく申渡しました何が分大勢
のこととて稍ともすれ決闘沙汰及ぶ故池田大隅守初め頭
だつたる者も至極苦心を致して居られました然るも參謀長西
郷吉之助方へ度々の訴へ今日も彰義隊が新云ふ事をした昨日
は谷中で彰義隊の爲に兵士が傷を受けたと云ふ體を訴へた昨日
あるふ付總督も大きき心配あらせられ如何はせんと思ふ
所へ北海道鎮守府總督として四條高秋の兩中将東都へ下向せ
られ後草田甫六郷邸を假りの旅館も充てて赴く事勢をか扱ひ
ありて居られました何が分内も狭く万事不都合を購すに就
て總督へ申出もあり東叡山寛永寺を旅館も充て度由を願出
られ丁度彰義隊の振舞も就て色々と議論のある所故早速か聞

上野答戦

濟にあり山内へ使節として津田山三郎を遣はされた(此津田
山三郎とすされし人が一度下谷本郷より選出の代議士津田眞
道氏の前名でいいます)當日騎馬にて從者十四五名を連れられ
東叡山へ赴きし山内よ於ては出入尤も嚴重の折あれば黒門
は閉てあり門番所も控へたる者は何れも彰義隊の者を見へ若
者達ハ銘々武藝の話をして居る故津田は馬を下り丁寧に黒
門前へ近づき津田門衆へ申入れる拙者事は有栖川大總督の
使節津田山三郎と申す者輪王寺の宮へ拜願致し申傳へる大節
多つて罷越した此段宜しくお取次下されまし門ア一有栖川
の使か待つテロ只今取次てやるから下云ふた儘二時余り候た
した何がの返答もなき故津田は胸中に怒り津田門番最前より
待たして置て何の返答もなきは使節の拙者を輕蔑するよあら
ず總督を輕しめるに當る早々取次げ門コレ余り大仰な事を

上野谷戦

云ふを取次く時は取次で遣るッ只の門控じゃねへ三河以來
徳川家の伊供をした我々の先祖今日に相成つても徳川家の伊
恩澤を重ねるもので官軍風を吹かせやがって氣の済むまで待
つて居ろ 律重ねくの暴言罵詈上は立歸つて總督へ此事
を具申致すまでの事サすれば反つて宮の伊爲もなるまらト
門の内と外で喋々と論じて居る所へ澁澤誠一郎來掛り此事を
聞て又々若者を制し自身も覺王院殿まで申上げる然るも伊執
當覺王院殿速よ伊承知よ相成り對面を致すとの事で案内の者
二名黒門へ來り使節を呼入れられ最も宮家の成らせらるる所
あれは多人數は相成らん津田山三郎外二人を許され覺王院へ
案内をするサア廣間へ通り山三郎は相待つ事暫くすると伊都
義親お立出に相成り此時彰義隊の重なる人々の今日の使節何
事と心痛致し襖紙の陰よ立歸きを致しました此時 覺使節よ

上野合戦

は伊苦勞も存する宮近頃伊不快にて何人も對面を致されバ
又宮の伊一身上よ對する公私諸般の用件は拙僧の總理する所
依て使の赴を述べられたし 律左様仰せあらば貴僧へ申述ん
使節の赴は此度北海道鎮守府統轄四條高取の伊兩脚淡草田甫
六脚邸を假旅館と定めしも何分邸内狭く諸事の都合悪しく依
て當寬永寺を兩脚の旅館又充て輪王寺の宮は今日より日數七
日の間よ深川鹽岸寺へ移轉致す可く最も警衛をあす彰義隊と
唱へる聲は何れも宮に付屬致すべし總督の命を奉じて此旨傳
令すト聞くと敢へず覺王院目よ角を立て滿面朱の如くよなり
津田山三郎をハッソと睨み 覺扣へられよ津田山三郎殿ト茲
に覺王院萬丈の氣餘を吐て津田使節を追歸すと云ふの物語

第十四席

法衣を身よ纏ひ眼光炯々として人を射る執當覺王院は此時坐
五十九

上野合戦

を道ゆ 覺只今の仰せ其意を得ず北海道鎮守府統轄四條高
の兩卿不便あるに依て當山を借受けたしとは何事あるや开も
一品親王輪王寺の宮は當天子の血統あり四條高歌は其臣下
あらすや其臣下の不都合も依つて我輪王寺の宮に移轉せよと
は何事少是を承引ありて殿下よは如何ある思召あるか必ず
移轉の義は誓つてあり申さん 津是はッリ借都斯る大事を
貴信專斷の返答は殿下を輕蔑するも當る宮へ告びて該確答を
致せ 暨先刻述べたる通り荷も拙信は宮の御一身も關する諸
件を總理する者あり我返答は宮の御言葉と同様立歸り總督殿
下へ此旨を申上られて然るべしと其威風四邊を拂ひ實も東御
山 義常覺王院丈けの見識を具へたる有様に津田山三郎も思
非なく東台を去る此時彰義隊の若者津田の歸路を妨げるも
れば馬番するもあり實も物騒しき有様ありサ、覺王院は右

上野谷戦

覺の赴を宮家へ具申し尙彰義隊の重役とも協議し斯る返答を
すれば有極川殿下にも御立腹あつて若し兵端を開く場合よ
も至らんかさはあらば先づる時は人を斬し後る時は人に刺せら
るとやらの古語を服膺し今日其方面を定めて用意を致すべし
とありければ池田大隅守竹中丹後守等畏り早速山内の出入を
御殿重ししよ、其手配をあしたる部署を見てあれば先づ
黒門口を大手を定め神原の神木隊九十六人隊長が酒井長助副
長よの布目又兵衛石井八彌井上文治世話掛には小田五郎助大
久保藤十郎又中堂前西手には會津の臥龍隊長よは内藤兵衛
柳田小六郎大塚慶一夫れより中堂前東の方は順忠隊を長よは
細倉賢左衛門此人は淺草山谷も居て上野瓦解の後には専ら惡風
の排借を以て世を氣樂よして居られ上野へ這入る時敵る時よ
敵り借みせぬ櫻殿ト云ふ誓句をして隊入した位も人物越え候

上野合戦

諸は多騎一番隊二番隊と控へたり此隊長は山中孝作今井
太郎開も一番隊二番隊と云ふ者は三番丁より引上げた隊で
いまず本坊前は満字隊として隊長は久世盛徳守此隊長
と云ふ方方は關宿の久世大和守の若殿あり山王台は彰義隊の
預る所池田大隅守春日三右衛門近藤武雄仲紋五郎小田井康太
菅沼三三郎川上善徳杉山佐左衛門新居庄太郎大塚覺之進大久
保權右衛門春日半五郎柳原健吉中條金之助澁澤誠一郎天野八
郎等として又寒松院詰は秋本孝之進丸毛初負又覺王院詰は
は加藤大五郎高橋賢太郎小川良八郎天王寺詰は齋藤藏吉今
井貞次郎中川喜代之丞記録掛には齋藤金左衛門久保田甚介小
野安太郎等あり又器械掛は阿部重作松崎平三郎田中清八郎
の三人會計掛は飯田豊之丞百井留次郎之丞司る又新黒門口
は竹中丹後守入道春山永井主水正諸岡美作守車坂口は明石

上野谷戦

の正石隊々長も同勝浦金太夫清水門口には遊軍隊として隊長
は加藤幸一郎夫れより本坊前を堅めたるは一番隊々長は
土井八郎あり二番隊菅沼房次郎三番隊松本榮太郎四番隊島井
常三郎五番隊松本鼎六番隊淺川文次郎七番隊石川善一郎八番
隊木下七郎九番隊高橋新吉十番隊大久保龍太郎十一番隊佐久
間末次郎十二番隊比留問良八十三番隊安藤助藏十四番隊今井
織十五番隊古屋万太郎十六番隊西村賢八郎十七番隊村越三藏
十八番隊山崎政五郎等として上野彰義隊總勢は八百三十六人
を宣言すも雖も其實二千七百二十一人石本坊は整列して旗鼓
堂々スハ官軍寄來らば一様にせんと手懸引いて待構へたり勇氣
凛々山内の樹木も既も旗鼓をささんかと疑ふ許りの有様あり

第十五席

ナア申上ます是まで観つゝきました東台の戦事實記最も小生

上野谷戦

は下谷生れで丁度開戦當日の老も居りました。是の端仲町で
いまして山内へは二三出入り致しましたし又彰義隊も懸
意をお方もあり種々話も聞きまして十五日開戦ある事
は山内の者も至く知らなかつた様で申します。實は開戦の
開戦になりまして、ケレ山内は大砲とすのは柳原の神木
隊が黒門口を堅めまして其黒門口一門備へてありましたと
山王台一門もいまして此山王台へ大砲を備へましたのは
彰義隊中の大久保權右衛門の備へたもので何云ふ譯けだ
と申せば大久保權右衛門は小石川江戸川縁にお屋敷があつて
七百石の旗本で申すに本家は野州鳥山にて三万石大久保
土佐守と申す屋敷は下谷三味線堀忍の行田の松平下總守の屋
敷の向ふで三万石では申すに内福な屋敷で丁度五月
の五日節句の事で土佐守殿の庭先さよ水を打たせお居間よか

上野谷戦

茶を召上つて居る所へ取次の者侍へ申上ります。分家權右
衛門殿お出なりました。土左様か珍らしい者が参つた此半
年餘り機嫌にも参らんかつたが今日何と思つて罷越した
か余程面白い老人だ直は是へと申せ下仰の儀取次の侍此山を
告げる權右衛門大さよ喜び其儀與へ通り申した。何時來ても
遠慮も無い昔の大久保彦左衛門と申した仁の斯云ふ様な人で
あつたかと思ふ位。權曹くは不沙汰を致して恐入りました。本
家にもお替りなく大慶も存じます。土是の權右衛門久しく見
えんから病氣でもあらふかと心得盛ながら大きき必痛致した
が堂か致したか。權へ二難有ことと今年五十一才も相成るが
未だ振出一服飲んだ事もムらん。土承れば其許東台へ参つて
居る由彰義隊へでも這入つたのか。權イエ、別は彰義隊杯
へ加入しません。土左様あら宜いが東台へ集つて居る者ハ俗

上野合戦

六十六
 又申す猪武者決してア一云ふ所へハ加盟致さんが宜しい今日
 の差當つて用事もなくバ一基相手を申付ようか 權左様で差
 したる用事も申す故一番か致へ申さうか 土夫れが否ん其
 許の天狗を申すが二目と違んんでいか 權今日は只で
 の仕ません何か賭るから一基か致へ申さう 土賭基……と申
 すか左様な野阜を事予の好ましくない 權イェ〜賭基と
 申しても伊本家も金銭の賭杯の手前も天下の旗本で仕ません
 土何を賭る 權伊本家の毎度伊所望ある此差添ハ正眞の
 定宗是を今日賭けませふ 土予ハ何を賭ける 權君は何と申
 して極めませんで何ありと下し置れるハ宜しいでござらんか
 土左様あら予が勝てば定宗を取るぞ差換へは還すが其時定宗
 は許して呉と申すな其許が勝てば何ありと望の品を還す 權
 夫れは千万添さい左様あら一寸教へて差上げましよふ 土

上野合戦

六十七
 天狗を云ふか下互ハね好みある事ゆえ直ハ益基を仕度し
 本家分家の伊兩君が五月の五日懸ひ中ハ好な道とは申しあが
 ら互ハ黑白を争ひました毎度申上げる通り基敵は借さもにく
 し又懸しとやらで今日權右衛門は風波悪く先つ六分通り負け
 そうよ付き 土權右衛門モ一投けても好いではないか其許の
 基は立たぬ様たる 權是からが面白い所で 土國太いあモ一
 定宗に泣別れか權あか〜此位で降参は致しませんか下夫れ
 から氣を入れて打始めましたが今まで六分通り負て居た基を
 物の見事ハ願殺しいよ〜作つて見れば二十五日の勝を得ま
 した 權本家如何でござるあ昔し取つた杵柄とやらで此位のも
 ので年を取つても勇士と鐵は朽ぬと云ふことがござらんや伊降参
 あさい〜 土残念じゃが負けれたモ一今日は是切りだ 權基
 は是切りでも下さるものは如何で 土何でも持つて行け通す

上野合戦

から 櫓「エ」左様あら頂戴致して参ります 土向が氣に入つ
せん故一門を頂戴致したい 土アレハ否んくあの品はモ
兩三日立てば國元鳥山へ送るべき品であれば否ん外の物も致
せ 櫓外の物は入りません大砲を是非頂戴致したい 土其方大
砲を望んで何も致す積りじや 櫓將か手前の屋敷へ装つて置て
も詰りません故上野三王台へ備へて官軍を盛殺し致す了簡で
土黙れ不屈者奴今日官軍へ抵抗する事を聽て大砲は恩か槍一
筋でも遣す譯はあらん」威丈高もあつて御立腹櫓右衛門ハ
少も屈せず茲に御本家と大議論をして一門の大砲を得ると云
ふのお話

第十六席

此時大久保櫓右衛門も威丈高もあつて本家の顔を見て 櫓近助

上野谷戦

御本家もは余程毒藥をあすつたを拙者は五十路を越すと云へ
ど毒藥は致さんよ未だ三十の坂を越したばかりで若毒藥は見
苦いものだ 土黙れ予へ對して不禮であらふ櫓右衛門若毒藥
どの何だ 櫓武士に二言なしと云ふ事をお忘れあすつたか望
の品を遣すと仰りながら大砲はあらんとは毒藥あすつたよ相
違ない 土是れ余の物を遣すが大砲はあらんと申すハ其方今
日東台もあつて彰義隊も組して居るではあいか遣せば直東
台へ備へ様と云ふ心得であらふ我は官軍なり早く申さば敵へ
器械を送ると同じ總督へ對し軍令も背く故是はあらんと申す
のじや 櫓君は一を知つて其二を知らず其技を知つて亦た其
根を知らんと云ふ様なものだ今日其位位官軍もなつたればこ
そッ云はれるが开も徳川家康公御入國以來二百五十余年の
間居あがらよして知行を食り先祖の槍先で頂戴した三萬石は

上野谷戦

何の爲だ是れ徳川家の大恩と云はざるを得ず左れば關宿の久
世大和守子息隠岐守杯は父の勤當を受けて今日彰義隊は加は
り駿王寺の宮の守護二つは慶喜公再ひに山でん事を思へ
ばこそ親子たる者が義に制せられ臥れて東台あるは是れ徳
川家へ對しての誠忠否な盡すべき義務と申すもので徳川盛世
の頃は二百六十余大名旗本八萬騎あるが中にも一も本多二も
大久保と云われ別家分家も多く徳川家を取れば御親戚と申し
ても宜しき家柄夫れも今日官軍あるつたれんこそ拙者の望む
品もか聽入あいが是が御先代大久保殿であらは一も二もあく
御承引もあるべきを膝味愚物の白痴奴才確したと申したのが
過りか、此上は勝手に致せ 土己れ本家へ對し様々の悪口手
打に致す夫れへ直れ 權何……手打も致すと是は面白き若
碌の半兵及にて權右衛門の首が斬れるあら斬つて見る 土

上野谷戦

斬つて還す誰かある庭前へ建を敷き斬水の用意を致せ下以
ての外御腹立今は家來も扱ひ衆 侍御分家ある通りの御立
腹ゆえ只今の内ににお歸り遊ばせ左すれば跡々の所へ我々よて
か執做し宜きも取計ふ故早々お歸りが宜しい 權イヤ御信切
な忝ないが本家分家の間があれは今本家へ斬ると云ふから斬
られよう下其儘庭へ下りて荒越の上へ坐り少しも動せぬ有様
辭を掛け袴の股立を高く取り斬柄鎧を符めたる水田の風魚
の一刀を提げお立出ま相成り 土コレ水が打て下一刀御出
しにる家來も止むを得ずか刀へ水をかける段の水深へをし
て權右衛門の後へ廻り 土老爺言ひ置くことはあいか 權別
よ言置くこともムらんさあ、早く斬つて貰いたい 土引
斬つて還すが今引導を渡して還すから極樂往生を致せ 權引
導でも何でも還るがえい證據して居る癖は御臭くかなりあす

上野谷戦

つたる 士イヤ予の引導は佛奥の引導ではない其方も侍士も侍士あるが故に戦争の講釋を致すから夫れを引導と思ひ生をしろ 櫻引導軍書とは新事で面白く承らふ 土往昔本曾義仲が旗上をあし都の上つて王意に反き朝敵と極まり是を關東の源氏頼朝と義仲征伐を仰付られ其時三万余の同勢を指揮して頼朝は鎌倉より止まり範頼義経を大将として宇治勢多思し召しし宇治勢多共敵は大河を前より控かひて陣を取つたれば味方は河を越ての取ひかれは名馬あふては勝利を得すと考ふる中宇多天皇九代の後胤近江源氏の頼朝佐々木四郎左衛門高綱鎌倉發足の時頼朝の乗馬池月の拜領を願し頼朝は替池月は乗馬よしして遣すことあらぬとの仰せ高綱然らば御召替應墨を拜領致度と望む頼朝再び申されけるは應墨は先新堀

上野谷戦

原源木景季へ遣したれば外の馬を望めどあつた其時高綱は涙を流して梶原源太と某を同様と思召すか御父義朝公待賢門の夜破れ尾張國野間内海長田が爲謀られ敢あくも義朝公は浴殿に於て御落命の御君は未だ十三才助殿の君を申し上げし時源家八領の内ある乳生毛の鎧を身へ懸ひ戰場を立退かんとし平家の侍も取押へられ京六波羅へ引れ既首を打れんとおしたる時小松重盛池野の禰尼性命乞ひによつて危きを助かり伊豆國蛭ヶ小島へ流刑の身とあらせられしも治承四年八月の十五日石橋山に義兵を挙げ玉ふ其時御味方として僅か六十三人あり當時高綱の都より止まり遠藤藤時守友時の許に隠れありし君御旗上と承り一騎に伊豆國眞名鶴ヶ岡に馳付御味方より加はりし時汝は源家開興の猛臣ありとの仰を蒙り夫れより數度の戰場に軍功を顯したる某を二股武士の梶原と同

上野谷戦

じみ見做し遊ばすの近頃以て情あし梶原へは慶盛をお遣しよ
相成る上は是非某は池月を玉はり度と望まれし時又頼朝其
返答も困みし儘高綱何様申すと云へど池月の近頃ぬが其代り
既よ到り偷んで行く分よの事だ池月を偷んで相當
の働きをせせば偷みし科の許して遣る偷めと仰がある此時左し
もの高綱も上の御心底を喜び池月を偷出し其名馬があつたれ
バこそ宇治川も源太景季を乗越して一番乗を致した其功が
あれバ前の罪の消へる侍として申せし言の二つあらふや死し
て官軍へ抵抗すると云ふ事を承知して大砲が遣られるか其の
方も今佐々木高綱も做ひ明日は國表の鳥山へ送るべき一門あ
れバ其時上野山下の邊も待受け舟かして奪取り夫れを山内へ
備へたら宜しからふと指圖は致さぬと其邊へ心を付て此處へ
謝つて立歸つた方が宜しからふ
梶原長ひ引導だ御本家の御引

上野谷戦

導相解りました重々の過言恐入りましたと謝入つて頭を下び
る土然らば今日は赦して遣す立歸れ下仰せありながら梶原
衛門の顔を見て御落涙梶原衛門も又本家の心中を察し涙を胸
よ溜てり別を申し大久保土佐守の屋敷を立出て東台へ歸つて
用意をさし大砲一門を手よ入れると云ふのお話

第十七席

大久保梶原衛門の初て本家の心意を聽て恐縮をさし是迄の不
禮を詫入る土梶原衛門予の引導の解つたか梶原も無常の
雲霧を拂い彌陀の淨土と申すの佛奥し御心底を承り難有御
暇を申上げます土明日の晝頃より人数を差出せば其刻限よ
其方も仕度をして参られよ下打解けてのお物語り御酒を飲て
梶原衛門の立去る直も用人村岡與兵衛をお招き相成る早速與
兵衛御前へ出で兩手を突く土與兵衛明日は國表へ大砲彈藥

上野谷戦

等を差送らんければあらん予大砲の一門發して一門だけ送る
様に致し彈藥小銃等の申すまでもない差懸ひ手落さく仕れ
與畏りましたエー警護の者の何十人程用意仕しようか
何十人と云ふ多人數に入るまい人足の千住の岡屋場より差懸
せの差支はあい外探偵を致す者が一人小者三四人もあつた
ら宜しからふ 與是は怪しからん事近頃東叡山より彰義隊
と唱へる者大勢集り稍々ともすれば人夫を取押へたり殊に外
の物とも違ひ大砲の小銃のと云ふ者を持つて通れば必ず森の
んとするは相違ひいません少くも手練の者三四十人の懸
さすはあるまいかと存じます 土予の思ふ所とは大層違ふな
予の成丈け物の役も立ん極弱い奴を一人付けて遣らふと思ふ
病人でも宜ければ臆病者でもよい臆病の怪我の致さんと云ふ
事だから成丈け弱い臆病を奴を遣らせ 與へーニ奇体者か

上野谷戦

御用も達ちます左様から吉田孫右衛門が宜うムりましよう
土孫右衛門の臆病も 與一通りも臆病でいません 土刀
でも扱れたら腰位抜すか 與請合つて腰を抜します 土然ら
ば其者も致せし仰せのあつたが用人の與兵衛への願を解らす
拜領の赴を孫右衛門へ申入れる本人も承知した慶應四年五月
の六日出立と云ふ節殿様自身も孫右衛門へ仰聞られたのは若
し途中で何者か出て刀でも扱ひたら必ず手向ひをせず先方
の望む物を遺して立歸れ 孫委細畏りました併し何か出る様
ある事でもムいませるか 土ウム東叡山の森を離れぬ内も出るだ
らう 孫へーニ不氣味を譯でムいませす下鼠狐に仕度な
し三味線堀大久保土佐守の屋敷を出で御徒町通りより屏風坂
下へ掛ると十四五名の彰義隊大久保權右衛門真先き進み
相苦勞く 此所で宜しいから大砲其外假て立歸れ下云

上野谷戦

なれ孫右衛門見れば昨日の出もつた伊分家が先立ちで何れも長刀を差して返答によらば斬らふと云ふ程の構態 孫ア是れだか手向の致しません廻らすか渡し申しまする故か請取下さい 櫓孫右衛門が本家又櫓又倫みましたと申上げると孫右衛門を歸し人足も申付て此大砲を東台へ引上げました山王台へ砲台を築き廣小路の方へ筒口を向けて用意を致しました、ケレト手違もある時の仕方のもいもので此大砲を打ちまするのが天野八郎の役でありました天野八郎の田付流の砲術家であるを移しましたたが何云ふ具合でもつたか砲台も狂いがあつて火先が西の方へ曲りました夫れ故玉の不忍の池へ打込んで給や願を噓かしたばかりで何の役も立たず仕舞ひましたモ一其時天野の今日の戦所勝利のあいと云ふ事を語りて戦死

上野谷戦

の覺悟をした人で小銃と違ひ此時代の砲の一たび放射するを其筒の冷まする間二時間でも三時間でも待たねば跡の火薬を入れる事の出来あいのもので夫れ故此大砲の一發したありで跡の何の役も立たずに仕舞ひました去る人の話も大砲も大久保土佐守と云ふことが形付てあつたのを戦争が詳むと問もあく職人体の者が七八人来て名前の所だけを磨利して居たと申すことで官軍も目も付ひたが其儘も磨利がさしたと申します、シテ見れば官軍も略其事情を知つて居ても其邊の余り嚴重な調へもしあかつたものと見へますサテ此大久保櫓右衛門と云ふ人の中堂前で彈丸も中つて落馬致され其時又年來奉公をして居た馬丁の常助と云ふ者が櫓右衛門を引擡て森へ遁入り機子を見ると彈傷ばかり四ヶ所もありまして其内究所へ中つて居るのが二ヶ所もあるので所詮立退く譯もあらんと心得

上野谷戦

主人に尋ねますると切腹をするから首を妻子の所へ届ると云
れを馬丁あがら氣丈の常助が首を斬つて旦那の衣服の片袖へ
包み小石川江戸川縁の屋敷へ持つて参り新造子供衆も渡し
ました大久保の妻君の其首を懸へ用ひ菩提所へ葬りました常
助より多分の金子を與へました茲に常助も無常と悟つて坊主
も致ししますと權右衛門が四十郎で常助が左四次と云ふ役で
幕泣かせます所では是は余事を申上げて恐入りましたが大久
保權右衛門殿の成行は是はよて止め是より本講の骨髄いよく
開戦も相成ると云ふの一言は次席のお樂みと致します
第十八席
東台の大手も形取りました黒門口は越後高田の城主十五萬石

上野谷戦

柳原式部太夫の藩士等九十六人は是を神木隊と申して外の隊と
は違ひ神木隊は九十六人でも武器其外は二百人分殊と外科の
醫員も三人程付けてありまして彰義隊に器械の不足は神木隊
より補充する位手當十分又屈ましたのは全く隊長酒井良助
の盡力と柳原の家老三千石を領せられた原田兵吾此仁の
志に依られました所其柳原の家は仁木右京太夫義長の末孫此
人應仁の乱に浪人して三州額田郡矢矧在柳原村に住居し郷士
となつて柳原の姓も改め然るは柳原七郎右衛門長政の時徳川
家康公より御見出し預り徳川の男岡崎次郎三郎信康公岡崎
の城より御切腹の節追腹をさし尤も家康公の思召より小平
太康政家督を繼ぎ徳川家と對しては忠勤の家又徳川家も柳原
家を御見捨かたなき間柄なれば或る時家老原田兵吾殿へ密々
御目通りを願ひしに早速御許になりお居間へ案内をする正而

上野合戦

又式部大夫殿を控へ相成り兵吾ハ兩手を突き頭を下げる
兵吾密談致度と申すは何事じや
兵吾恐乍ら余の義候ハ近
頃慶喜公は朝敵の名義を受け當時常陸國茨城の郡水戸表へ
居仰付られ御躰身の御身の上夫れハ付徳川の志士は今一度
喜公の將軍職を復せられんことを冀望し當時輪王寺の宮守護
として東台へ屯する彰義隊の者恐く七八百も過ぎずと承る何
故御當家にては勇士を撰び御差出しは不相成哉此義御何
申上度罷出でました
式兵吾何を申すか彰義隊と申し東台に
屯する者の敵とするは既官軍あり我れ素より天朝に對し弓
を引くべき道理あければ今總督の御下示に従ふ身の上然る
藩士を東台へ派遣する事秘かあらず右様の義は予が方向を誤
り大義名文を忘れて出兵する場合あらば其方老臣の事あれば
是を異見すること至當あり然るも今反つて出兵を促すは其意

上野合戦

を知らす心得違を致すな兵吾此事ハ付重て耐むる事願じて無
用である
兵吾左程の思召あれハ重て出兵の義ハ申上ません
併し他家と違ひ御當家は徳川四天王の内にも取分て御縁近
く天下の諸侯他家ハ知らず神原ハ第一ハ隊入を致すあらんと
思ひの外あらんとあらば只今より兵吾御殿を頂戴致し三千石
を返納して無縁の浪人となり山内へ至り方々相謀つて其先
手をも務むる心底御殿を賜はりたい
式其方は知行を抛ち一
命を棄ても東台へ入ると申すか
兵吾恐乍ら武家も育てる者は
宜しく仁義の公道を知りまする者で殿は今日官軍とあれハ他
迄も支へ玉ふは人情の然らしむる所我々又中興の御先祖康政公
へ對し決して聊の志を立てまする心底某既ハ決す妾子ハ眼
を遣し菩提所へは聊の金子を納め最早心残りもあさ身の上只
管御殿を賜はり度
式兵吾克く申した予も素より人数を引

上野合戦

ひて東台へ乗込みたき心底あれを過日總督より添なき御言
を玉のり依て錦旗の下に止まる予である其方夫れまで申すな
ら万事其方へ任かせる中興の先祖式部太夫康政耻辱あらざ
る様取計へ兵上の伊一言を承知致し兵吾身を取り如何斗り
か添なく存じ奉ります 式ヲテ兵吾其方の見込で人取何程
位派遣する積りじや 兵實の伊家中より有志の者を既し一
人程募つてムります 式ウメ大將をあすへき人物の何者ある
予 兵過日まで小石川龍慶橋際より町道場を開き居りし酒井良
助此者も申付心添ひとして布目又兵衛石井八郎近藤文治等へ
申付置きました 式サテの夫れまで手配を致しあつたるか
然らぬ大將分も目通りを許すト伊言葉の下より原田兵吾早速御
蔭を立ち間もあく酒井良助を召連れ次の間も控へさせ改めて
伊目通りを願ひ再び大守か廣間へか立出よ相成る此時 兵恐

上野谷戦

乍ら御意も従ひ良助を召連れて罷出てました 式良助目通り
を許す頭を上げえ 良麗しき尊貌を拜し大慶も存じ奉ります
か目通りを仰付られ難有存じます 式此度の役目當家の瑕
もあらざる様取計ひ呉れ 良此度の原田氏の伊取侍を以て不
肖の某九十六人の有志を指揮致すべき大役を仰付られ身にと
つて添なく御當家の美名を如何で汚すべきか良助一命を捧げ
て伊奉公仕ります 式克く申した其方へ引出物を遣すト伊自
身にお立遊ばしてか次々廣間も武器一通り陳列致してある中
も墨書雲龍を畫きたる陣羽織是を酒井良助へ下され側も見て
居た原田兵吾某も志とあつて兵吾自慢の乗馬櫻戸と申す名馬
を良助へ下さる又伊前も於て伊益を玉のり酒井良助は上の思
召兵吾の志心魂に徹し添なく直に九十六人の者を隨へ以上百
人まで隊入を致しました譯でムいますから内々原田兵吾が取

上野谷戦

斗ひ器武庫ありし武器も東台へ送るし又大切の大砲も東台
山へ持込ました位されば後より東台が破れて何れも難
辛苦をし輪王寺の宮初め罪ある内は京都より止りありし位何
れも相當の處分仰付らるゝ中より神木隊の兵は奥州仙台まで
お供をさし同年の十月十日より仙台の開門山仙學院で宮様御降
伏となり其時脱士の者は諸家へお預けなる其中より神木隊の
兵士計りは神原へお預けあり底で何れも喜んで越後高田へ
参つて其勲記を見るより一語を擧げて官軍とあり今は忍び履地
へ越さし神木隊の者は大義名分を知らぬとか野登先見と暗い
とか云つて冷遇瓜弾きをして誰も交際人がない位殿も別段よ
お目をかけさせらるゝ様子もあき放底で原田兵吾は神木隊の
者へ對し氣の毒に思ひ三千石の食糧を二つに分け半は君へ返
納し半は神木隊同盟の者へ分配をさし奈より妻子は暇を出し

上野谷戦

てあれは心残りもあく遠く日光より至り會津肥後守殿が大
宮司とあられしと付此許へ参り望んで神官の一人とあり會津
侯と俱々徳川家康公靈前より奉仕し居られたり話頭復廻其位に
原田兵吾が手配を致しました故神木隊は醫者まで付添ふて居
た譯でふいます然る所慶應四年五月十三日有栖川總督殿下よ
り使節を以て申越されたるは明後十五日東台に於て參謀長西
郷吉之助山内執當覺王院義親と面會し軍政上より付談判すべき
次第ありと申越され山内に於ても方々一談判不調とあるゆら
ば彈丸雨中の間は面接せんと用意既と整ひヌハ來らハ來れど
待拂へたり開る此談判果して如何ある景狀を呈するや次席よ
委しく申上げます

第十九席

五月十五日の朝五月雨の降り何となく物寂しく何も四月五

上野谷戦

月の雨の多い月で四月の雨を卯の花下し五月の雨を五月雨杯
と申すが降り初めると永降の致しませぬので「星一つ見付けし
夜半の嬉しさは月も勝る五月雨の空」下やらで山内の彰義隊
早朝上野小路の方を見れば兩側共に官軍整列して居り升し
突當りに藤堂の一隊が列を正して一大隊ばかり上野の方へ大
砲の火口を向けて備へました是を見たる彰義隊の者も不審を
懐き今日の参謀長西郷吉之助當山へ來り傍に當覺王院殿と何
か談判を致す由夫れ承知致したれど斯く大兵よて東台を取
圍むの合点行かずと各々是を心付て居りましたスルト仲町
の方より因州の一手百五十人ばかり大砲を牽て廣小路の通り
へ出るや大砲を東台へ向け砲發を致しましたナレハ火術が盡
して居りません故に筒先が上つたと見へて中堂の屋敷を越し
ました此時黒門口は備へたる神木隊の隊長酒井良助の斯くと

上野谷戦

見るより採配を振ひ其示下は豫て備置きたる大砲コブ下り
又砲發を致す是は因州兵の真中へ的りました其内薩州の一
隊よりも砲發を致す山内では用意の木石を投げて近く者を懲
す其内山下の雁鍋或は岡村杯と云ふ料理屋の二階へ何時の
間にか官軍が控へて横打し山内へ連發する何も其物音は不
の池に反響して實は百雷の一時は墮落し來て破烈するかと思
ふばかり廣小路仲町山下邊に住居する人々は妻子の手を引
逃げるやら周章狼狽實は目も當てられず是内藤堂の一隊よ
り大砲一發放たれたのが中堂の左手の的りました山王台
も備へて置きました大砲を天野八郎が打たんとして据てある大砲
の台が動きました計りで不忍の池へ打込みました是は前席に
述べた置きました通り大いある手違ふ相成り天野八郎は申
も亦く戦死の覺悟を致し車坂口へ向ひました其内薩州の二番

上野合戦

隊、細川、秋月、藤堂、大垣の戸田等の官軍は黒門口を破らんとした
く、取詰るを黒門を開き南盤鉄小豆流の鎧軍衣より甲手匣當
を着け鎖鉢巻をシツカとなし櫻戸と云へる俣馬に打跨り神原
の殿より拜領の墨雲龍の陣羽織を着用し白紙六十六枚の探
配を以て下示しけるは神木隊長酒井良助馬助を助けて布目又
兵衛石井八彌井上文治等切つて出る見る、問ふ小銃を打掛
け寄來る官軍を伊橋脇まで退返し此時神木隊の内より風間駒
吉と名乗り大刀を振つて躍出たる一個の若者年頃二十二三よ
して猛虎の勢を以て叱咤奮撃當る所前なく披く所へ大垣戸田
の兵士等迎へ撃んと急る内見る、問ふ四五名は切倒され進
んで群集の中へ躍入らんとするを夫れアの若者を打取れど細
川薩の兵士等入られて十四五人風間駒吉を取巻ひたり駒吉身
体既ふ十五六ヶ所の傷を受け、ナレハ屈せず死物狂ひよあつて

上野谷戦

軍へぞ遂に御橋の脇松源の前まで落命見るより官兵作の屍骸
を踐んだり蹴たり致すのを黒門口にあつて布目又兵衛一瞥大
に怒り忽ち彦山禪杖定秀の一刀を振つて疾風の如く飛込み
官軍五六名を退退け倒れ居る駒吉の屍骸を左へ抱へ山内に引
上げたるは目醒しかりける有様なり此時酒井良助の馬側を控
ひたる遠山正四郎本年廿一才銘々の働を見て其身も遂に越
つて官軍の中へ躍込み立ち上り三四人を切倒すと雖も遂に越
しよて打死をする只此時に不憚と思ふのは神木隊中の宇山金
三郎十九才此仁開戦もあるや隊長酒井良助より切込の下示を
待たず擡て働き左の股へ鉄砲を打たれ小鬘先へ傷を受け其外
七ヶ所の重傷あれども屈せず働き居たる時何れより飛込しか
弾丸は膝頭を打たれ是が爲に一たびは倒れしも氣丈の宇山金
三郎死ねばとて汝等も打れべきかと流る、血潮の一刀を杖に

上野谷戦

つぎつゝ中堂前まで鎗々ど引上來たり此所まで切腹をさんと
刀を取直して腹へ刺うとしても究所も深手の傷あればこそ手
元も狂ひ死ぬ死なかね苦みあがらも既山内の破れ官軍の
進入する時まで中堂前も血眼もあつて悶へ居る所へ四五名の
官軍宇山の姿を見て大きき笑ひ斬つて仕舞へど云ふ者があれ
ばこんち者を斬るも汚らはし助けて遣れど云ふ者もある中よ
禮儀を知らざる人獣と見へて苦み悶へて居る金三郎の頭も小
便をしつかけ足蹴りして居る所へ大垣戸田の傳令使今村嘉八
郎來り鎗々を制して遠け宇山の姿を見て不憚と思ひ
斯る手傷を負ひあがら此場も至り何故死運れた
思へども手先が狂つて切腹が出来ません何も力が……出なく
て……今猛悪野蠻の野侍の爲も死も勝る耻辱を受けたり身
心あらし我が首を斬つて呉れ玉へ
嘉ウ、流石大勢を切捲く

上野谷戦

りたる英雄大丈夫の一言何れもあられる 宝十九で 嘉番の
花を散らす侍もあらず下反つて自分部下の兵士も下示をし
て是を戸田の隊へ引入れ介抱をして呉れました宇山氏の天未
だ見捨てざる所と見へ斯る重傷も癒へ今日も至り根岸御行の
松の邊も閑居をとりし其日を送らるゝの實も高運の人と申すべ
きか是を助けた今村嘉八郎の其高情を施したることを殿の御
耳も達し昇進致したること、サテ是より東台の破れに至る宮
様御立退の願末の次席まで申上ます

第二十席

此東台戦争も鎗々の打死や官軍の手柄を一々述べて居りますと
あか／＼急も局を結ぶ所へに至りません故戦争の模様も骨髄
だけ申上げて所々形容的の言詞の排除致して申上ます、東台
總攻めよするからと申しても黒門閉りせぬいません屏風板

上野谷戦

口清水門もあられ新黒門口もあり何所からでも攻めそふなる
のたが底が軍政上よ於ける軍略で大手と思ふ黒門口を破るの
が専一と見へて左れば一番黒門口が激戦で入りました柳原の
神木隊が必死ありて防ぎ彼是四ッ半頃只今の十一時過ぎと
云ふ時分よ余り兵が疲れたに付て明石の正石隊と大手を代り
ます途端よ因州の兵が山内から池の方へ落しする大泥溝が
ムりまして其泥溝の中を潜つて乱入致しました夫れ因州の手
賀大垣戸田等の兵は鼓譟咄天也も爲よ震動する計り突進し
て参りました是が爲よ諸所の口々一時破れました夫れ神木
隊の者二十一人最も重傷の者ではありましたが打廻つて塞松
院の書院へ引上げ並んで切腹を致しましたが此介錯は酒井良
助がして遣はしましたたが今日思出せば實に此人々は不憫とも

上野合戦

將た勇士とも申さるゝ方々茲に輪王寺の宮は開戦よ相成ると
間もなく御本坊御立退まあり林光院御靈屋御供所へ避難致し
ました當時宮様の御姿は白木綿の單衣手甲脚半足袋までも白
羽二重の上よ墨染の麻の法衣只麻の法衣と申すと余り鹿末を
様よ思召す諸君もムいませしよが只の麻ではムいませんで
二錢銅貨位の丸さよ十六の菊の織出しよあつて居ります品
で俗僧よは着られません物では是は黒髪全頂をあさる時の御仕
度此黒髪全頂と申しますのは宮様御一代よ一度日光の黒髪山
の絶頂よお登り遊ばして行をなさる事がムります是を黒髪全
頂と申して其お姿で水晶の數珠を左の手よ掛け自ら綱代のお
笠を持って將几よ懸り居らせられましたか髪は竹林坊僧正申上
けて廿日ばかり以前よりか髪削を遊され今日で申す五分前
如き有様でお側には浄門院浄應院の兩人が如へ臨よ竹林坊僧

上野合戦

正赤松光榮守護し右手の方より評定所留役を前廻められたる
高野大五郎此仁の今日尙ほ麻布一の橋に居られませしが覺王院
僧正との懇意よて最も才子で宮家を精へか乘せ申したのも會
津地方へお落し申上げたのも其實此仁の方寸より出たるもの
でふいませす少し離れて二人扣ひて居りましたのが江馬軍兵衛
四天王の二人正田二郎加島新之丞是の警護として居られまし
たか付の醫者七軒町に居られました柴田立仲夫れ今一人が
下谷御橋町九番地家号を越前屋と申しまして湯屋渡世の縁谷
佐兵衛此者の矢張り覺王院と別懸宮様お立退きの節道の案内
を致すが爲は是は控ひ居られしました御靈屋御供所門外より柳
原健吉帆木線源氏車の定紋を付けた陣羽織を着し長巻を以
て將几も懸り側に松平康年大江紅等を始め其外門人七八人
是の御靈屋の警護を致した者で所へお小人關根仁兵衛黒門口

上野合戦

の戦既に破れたる注進も來る最も此時覺王院僧正は茲に居
られません此仁の緋の法衣の上へ袴をかけ燕尾の頭巾を戴き
繪扇を以て山玉台より切りと彰義隊に下示をして居られ
ましたされバ覺王院の見へすと云へ宮様只此先きの事を思
召居る所へ仁兵衛の注進も依り東台御立退と相成る輪王寺の
宮是より具さよ願難辛苦を嘗むると云ふのお話

第二十一席

南風颯々雨蕭々砲聲一發地上に進る彰義兵接戦剣閃々馬聲
吹尺を辨せず銃槍一たび眼前に躍つて飛ぶ鼓譟明喊草木爲
震動して東嶽山内局面一變じて忽ち修羅の街衢實は是れ維新
革命の初舞臺茲に輪王寺の宮の林光院に御靈屋供所へ立退
き何れも周圍を警護あし居る所へお小人關根仁兵衛御靈屋の
口も手を突き仁恐乍らや上げます只今黒門口の戦既に破れ

上野合戦

まして官軍退々も乗込みますれば速に此所を退立退あつて然るべくと存じます」申上げた時高野大五郎直も四根仁兵衛を還し竹林坊僧正も向ひ高野只今申上げたる通りの次第なれば宮も退立退が宜う存じます竹ッア何れへ伊案内を致すや高野より根岸へ出て三河島村へ退立退き彼れ三河島村町屋村上下多古村其外近村の何れも伊領分あれば退立退も相成ると云へど仔細なく其伊道筋伊案内兼て覺王院僧部とも謀し合ひました通り彼又控へる越前屋佐兵衛彼の者を伊案内として退立退下されたし竹萬事伊伺ひ申上げる間相待たれよ」其儘竹林坊より宮様へ伊伺申上げしと克きと取計へとの伊意依て退立退の仕度をおし榊原健吉又松平康年大澤純外門人一同も是非伊供を願ひしも多人数に反つて祝線を集るの恐ありと是の先へ退立退せました正田二郎加島新之丞、夫れよお留

上野合戦

師柴田玄仲此人々も立退かせ高野大五郎が先は立ち竹林坊僧正を後押へとして淨門院淨應院の間へ輪王寺の宮を入れ参らせ越前屋佐兵衛の二三町づ、先へ立ち万事伊注信を申上げるの手配林光院伊供所より直も根岸の笹の雪の脇へ出る道がムいまして是の上野出入の者でなければ知らぬ道で最も官軍よて廻りに柵を振り出入は禁じてあれども何時の間にか彰義隊の内より破つた者があるを見へ速に此道より根岸へ出て笹の雪の横町より三河島村名主松本市郎兵衛方へ御立退も相成る積り最も其方々の時は是へか立退ももあるべきよふ市郎兵衛へは沙汰を致し置たれば差支なしと降る五月雨の中を三河島村も懸る何の家も明家同様其等の上野も砲聲を聞て恐返す所の百姓は手の舞足の蹈み所を知らず家内の者を引連れ何所へ立退いたか丸で人あき街の如く然るに往來から二十間ば

上野合戦

かり向ふの畑中も笠も冠らず手拭の類冠り農業襦袢を着て大
きな奴が鉄使ひをして居る様子確と認めて高野大五郎は一同
の歩くのを止め高少々物をお尋ね申す「下申しても返答もせ
ず向ふをむいて鉄使をして居る様子何も只者ではないと思
れた其等品物を棄て家を開放しよして村内の者が立退く中
よ農業をして居るは合點のゆかぬ奴と高野大五郎は大小は目
立つから差しません短刀を懐中おし小銃を鉄の中へ用意し
高モ多古の渡へは真直よ参つて宜うムいますか百知ら
ねい高野村と申すと何参ります百知らないよ外へ行つ
て逃げ高野此所は三河島村でムいませうな百知らないよ外へ行つ
申したのでサアは官軍の廻し者よ相違ない三河島村は居て白
分の村を知らん奴があるものかど存じましたる故大五郎は大
音よヤイと云ふ聲よ彼の百姓振賑する時小銃をヒッパと付けて

上野合戦

百高野氏拙者だ〜ト類冠りを取るのを見れば神原健吉故
高先生夫りや何と云ふ妻だ健や先刻御殿屋を立退て別れ
くよありて是まで来たが何分官軍が立廻るので是非なく百
姓家へ這入り衣類大小を隠し農業の襦袢を着て斯して居たら
知れまいと思つたが解るかえ高夫りやア解る健何所で解
る高何所でと云つて道を聞いても知らんと云ふし第一三河
島村は居て其村を知らん百姓があるものか健是りやア一本
参つた成程そうだと笑出す内よ大五郎より彼は扣居りしハ襦
原健吉ある由を申上げる夫れよてよう〜一同安心をする所
へ越前屋佐兵衛の色を變へて駈来り佐へ〜申上ます此取直
の道へ行かれません藤堂の兵士が二三十人参ります故左へ切
れてお出ましますから用心をなさし〜云ひ棄て佐兵衛
居る所がムいますから用心をなさし〜云ひ棄て佐兵衛

上野谷戦

ハ又々急行く一同の者案内に任して行つて見れぬ成程官軍の
見へぬが出水して居る所が一町ばかりある腰位までは通入る
様子高野大五郎榊原先生を呼び暫く夫れに控へる様よと留置
て竹林坊へ伺つたのの迎も宮様が腰さきり遣入つてお越し遊ば
す譯ふのならぬ故健吉よか負弁せんと伺ひしよ克きよ計らへ
その仰せよ高健吉其許は冥加ある事だ只今上の仰せよ健吉よ
か負のれ度と仰る故向方へむいてお負ひ申上げろ健委細長
りました「下」速に伊請をなし向ふへむく所へ兼て竹林坊より申
上げたと見へて宮様の健吉の後へ廻りて伊請あさると今日の
荒木又右衛門とでも云ふ贈を取る位の人傑肩巾も廣くお負
るよの至極具合が克いと見へてしッカリお負のれ宮コレ
と一同の者も是へ乗れ健相乗りお伊免を蒙りますト笑ひあ
がら宮を守護して出水の所だけを通れバ直よ健吉へお腹を叩

上野谷戦

つたシテ見ると榊原先生の働ひたのの此時ばかりだサテ三河
島村名主松本市郎兵衛方へ伊立退よ相成り更よ一居の伊
戦を管むると云ふのさ話
第二十二席
踏て越前屋佐兵衛が三河島村名主市郎兵衛方へハ既よ通知し
あれば直よ伊案内申上げたが何分お隠し申すべき座敷もあ
く依て佛間へ僧侶だけを入れました佛間と申しても四疊半も
あります所が此所に忍んでお居で遊ばす所へ何分名主を勧め
て居る故入替り立かわり官軍が参り人足を出せの米を出せの
と云つて仕つ切りおしよ参ります故萬一認められておらん
と市郎兵衛も心配致し上多古村名主江川佐十郎方へ轉じまし
た此江川佐十郎の戦争平定の後家督を伴ふ譲り只今でも補宜
とあつて上野東照宮の伊屋屋よ奉仕して居りますが市郎兵衛

上野合戦

方より手狭あり殊に其家が忍ぶ所もふいません今日の時
で凡そ三十分計りか置き申上げたが何も夫りや危ぶない、云
ふもの、藤堂の官軍又大垣薩長の兵士が切り立廻る底を
頭をして居る遠藤治右衛門俗に川端の治右衛門を申します方
へ雨の降る中をお立退きよある茲に夕景までか置き申上げた
が此所へも官軍が立廻りす底で銘々相談を致し其相談相手
より江川佐十郎も松本市郎兵衛主人治右衛門竹林坊僧正淨門
院淨應院高野大五郎越前屋佐兵衛等よして此上は何した者か
と心配宮様は何のお言葉もあく居らせられ最も心配とは云ふ
様なもの、仮令官軍も踏込れても宮様を何する事も出来され
と只京都へお連れ申上げるまでの事だが夫れでは是まで形勢
隊の者共が一同若心した甲斐もあい何予此上は道の披て合
表へ出よう相成る様よと夫れを心痛するが故何れも顔を見合

上野合戦

して居りました中よ 高名主共何か今宵一夜か隠まい申上げ
る所はあるまいか夜明ければ又施すべき手段もある 市談に
恐入りましたが差當りまして思付もふいませんあア治右衛門
さん 治儀も先刻から考へて居るだがエー分別も出ね佐十郎
さんは何事もかけても利口ものだが何だね 佐己らも困つた
と何れも我身よ引受け心配の様子子宮も其様子を見遊ばされ
と一人の事よ付借侶ばかりか農民よまで苦心をさせるかと思
召しては落涙の体を見て取る竹林坊僧正進み出て 竹宮大方
ハ銘々の心中を察し落涙下され拙僧初め難有感謝し奉り
ます此上見苦くとも何れへなりと伴ひ申上げまする間今宵
し此所よ居居を願ひ度大五郎其方は先刻より臥して居るが
何かエー考が付ひたか 高左れば手前の思ふ所ハ佐兵衛先刻
申した通りよ致して貸ひ度 佐手前ハ差出るも如何と存じ扣

上野谷戦

居りましたが左様あら皆様申上げます實は手前の悪意も
す下多古村小原長兵衛方へ頼み置ましたが名主方の如何と思
石します 治是リヤア、エー所へ氣が付ますつた長兵衛が屋敷
の離れて居るし殊も人の氣の付かない所其上已ら家の裏
手から田船へでもか乗せ申して行けば長兵衛が家の前まで行
ける是は至極エー考へた 市流石は越前屋さん僕共の氣の注
かねえ所を克く云つて下すつたト口々も越前屋を賞める此小
原長兵衛と云ふのは俗に申す水呑百姓で家も貧しく夫婦掛向
ひで稼いで居る人だが妾の大ききんで一名大徳と申す籍名がム
いまして越前屋佐兵衛とは舊來の悪意あり殊も佐兵衛は屈た
人だから先刻宮様が松本市郎兵衛方へ居らせらるゝ内は佐兵
衛は小原長兵衛方へ行つて若し名主方の家が不都合の時反
つて氣の注かね當家へ頼むと云ふ事を申したとき長兵衛夫婦

上野合戦

は泣いて難有がりユノナ破れた家へ仮令一時でも宮様が出で
下されなば冥加を事だと申して居る位正直の人今越前屋の中
したことに決定しいよく 田船へお移し申す時高野大五郎
は竹林坊僧正の袖を扣へ 高きすれば今宵は其方へ一泊も
あると云へども何時まで農家へお置き申す事はならず拙者は
便を求め品川沖へ至り彼の回陽船へ近づき根本鏡次郎氏と面
會し今日の事情を語り船の用意を頼みせメテ水戸地方へ赴く
の用意仕る間左様承知ありたし竹林坊又別れ大五郎は回
陽船へ赴き茲に提督復本氏に面會の一説と此方は宮様小原長
兵衛の物置へお忍び遊ばし身の幸あきを嘆ち涙の袖に一夜を
明すと云ふのお話

第二十三席

川端の沿右衛門に集りし人々もいよく 手配をなし高野大五

戦谷野上

郎は現場より伊眼を申し是の品川沖に碇泊せる回陽へ近づき
此先宮様を水戸平瀨の港まで伊出に相成るに付船其外の事
を根本氏頼むが爲に此大五郎の立出でましたサヲ暮六つ過
ぎとある未だ東台の方に砲聲の止まず何となく人の聲の山内
へ宮様竹林坊僧正浄門院浄應院と四人の僧侶を載せました其船
分田船のことで狭いあるし余程御難儀の御様子川端の治右
衛門松本市郎兵衛江川佐十郎越前屋佐兵衛杯が腰まで這入り
其船を押して参りました勿論川と申しても溝の廣い位のもの
でムいす今央バまでお出よあると水の面も中堂の燃へる炎
ありくを映るのを見て宮竹林坊見よ未だ焼落ちぬと見へ
水の面も映る炎の物寂さ竹君の雲井にお育ち遊ばした御身
の上斯る淺間しき有様を伊認に入れるも恐入り奉りませす指し

戦谷野上

て行笠置の山を出てしより天か下にの程れ家もあし、伊眼を
りし後醍醐帝其古事も眼の當り竹林坊の法衣の袖も涙を
押へる浄門院浄應院の兩僧の宮様を勞り奉る此時船を押し
て居た佐十郎始め一同伊痛のしさに暫くの船を押す手の力も
抜ける位間もなく下多古村小原長兵衛の裏手の溝に船を止め
市郎兵衛佐十郎治右衛門の伊別れを申し人目立つてならぬ故
早々村々へ立歸りました越前屋佐兵衛小原長兵衛の方へ入
来り佐長兵衛さん此裏手へ宮様がお出まありましたお直ま
伊案内を申して宜うムりますか長エ……モ一お出まありま
したか鳴どの其所へ敷物でも敷きませ一妻、子お前さん敷物
と云つても別よあいから漉紙で宜かろうか子佐、子イ、夫
お所へお置き申したら何よもあら子一人が来りや直し知れて
仕舞ふが奥はあいかエ長越前屋さん儼しども奥の御坐敷の

上野谷戦

と云ふ様な所は無いませぬ 佐夫りや因つた事が出来た私も
二三度か家へは来たが何時でも門口で用を達し戻るから知ら
あかつたが丸で一間切りかえ 妻一間も何よも是切りでム
います 佐何かか隠まい申す所はあるまいか「長兵衛と俱に
心配あし居る所へ余り遅ひので竹林坊僧正か出よあり 林佐
兵衛何時まで船よか置き申す見れば松明杯を踏つて切り又探歩
くは官軍よ相違あい少も早くか隠まい申上げろ 佐其事又付
さまして只今長兵衛とも相談致しました何分何所と申してか
忍び遊ばす所がムいませぬ 竹夫れは困つたナ」下向ふを見る
と物置がムいませぬ田舎方の物置でムいませぬから武桶やら
あどが無造作又積んでありまして其上が霞あつて居りまし
たが夫れを目早く竹林坊お認めあされ 竹長兵衛あ物置の
霞の上へ伊家内申せ 長へーエ……何と云わつしやる勿体ナ

上野谷戦

いあんな穢之所へ伊家内が出来ませうか 竹イヤ「斯して
居る内よ官軍でも来らば一大事お説の跡で致す故少も早く」
竹林坊の言葉よ夫ならと云ふので霞の上へ紙を敷き杯して
居る内よ御案内申上げ恐る「其霞の上へか上り遊ばし右左
を淨門院淨應院等警護致し竹林坊僧正も俱に霞の上へ上られ
ました伊参考まで序よ申上げて置きませぬが宮様のか忍びよ
つたる小原長兵衛の宅は今日まで無事でムいませぬ夫れ故物置
へ心を張り杯してありまして随分歴史家は素より墨客杯も春
先き杯は見物よ参りませぬさうで御愛顧の諸君も王子より池の
川邊を御散歩の折は何ぞ實地を御覧よか出でを願ひますと申
上げて行くも行かぬは諸君の御勝手入らざる下世話で克く
川柳の悪口にも講釈師見て来た様を嘘を突き杯と云はれます
が是計りは實地で嘘も嘘であらぬ所では是だけが本統で跡が嘘か

と云われますと恐縮致しませぬが何れも本統の中の是が極正統
 の所であらうは是は余事を申上げて恐れ入りました、サア四人
 の位が隠れた寶の上へ小原長兵衛と越前屋佐兵衛が目よ付
 く所へ藁を積みました故一寸一目した位では人の居ようとは
 思はれませんが宮様始め四人は何とも怪ひかたなく蚊は切りは
 ばしたよ付越前屋は寶と思遣られました、竹佐兵衛く「トお呼遊
 たか竹佐兵衛や上は御空腹で居らせらる、故何か召上り物
 を持参致せ、佐左様でムい升私も氣の注かんでムいませぬ
 が只道の事のみ心配致しまして遠い召上り物はムいませぬ
 まアく一寸お待ち下さし」ト竹林坊屋をお供たせ申し小原長
 兵衛夫婦の者は相談すると家内が心付ひた者を見へて麥飯が
 仕掛けてありまして其麥飯を握飯として宮様へ差上げるより

一夜を明らす迄の御辛苦の次第は次席にて申上げます
 第二十四席
 小原長兵衛の家内が用意の麥飯を握飯として散紙にて包み散
 紙は穢い様だが一番消い紙で外の紙とは違ひ流返すことが出
 來んもので是で包んで越前屋佐兵衛へ渡し、佐佐兵衛さん
 は直に扱へるから一ッ先へ上げて下さい、佐承知しました」ト
 草履を穿て物置へ行き、へい出来ましてムいませぬ」ト寶の上へ信
 侶は上つて居るし間は藁で隠してあれば何所も何誰が居るか
 解らず丁度差出した時藁を押し分けてお顔を差出しとなり佐
 兵衛は紙よ包んだ握飯を捧げながらお見受申せば貴くも輪王
 寺の宮でいらせらるれば佐兵衛は悉入つて頭を下げる宮は親
 らお請取もあり仮令貴くも信侶の御身押戴き玉ふを佐兵衛は
 涙よ咽び御身の上を思へば御痛ましく侍き奉る、宮北方は戦

戦合野上

地より供致したる者身分は何者じや 佐治屋でムいます 宮
ハハ一遊撃隊の者か 佐左様でムいません 洗湯屋でムいます
宮先登を勤めた者か 佐イニ御門前の町人でムいます 宮
何町人か武士でさい砲隊を賜かば散乱をするよ克く是まで供
を致した追て沙汰よ又ぶ下仰せられたる時佐兵衛は我を忘
れ大地よ手を突き是まで輪王寺の宮を拜する事たよも容易よ
あり兼し身が直の御言葉を下し置かれし段百官を統ぶるの職
を授けられしより勝れる思ひ其内握飯も遅く出来是を各僧侶
又與へ館々空腹の時故美味として是を喫べました其後宮七年
御洋行を遊ばし御師朝の後北白川家を御相續よ相成り堂々た
る皇族の御身の上何か宴會の時とやらよ召上り物の佳鹿の御
物語り列席の者ども何れ彼是と評する中よ北白川殿下よは世
よ美味と申せば戊辰變亂の際小原長兵衛方で食したる麥飯の

戦合野上

握飯よ越す物はあるまいと戯れよ伊意遊ばしたる山俗よ申
す餓ひ時の鹿味ものあしとやらではよ就て面白き話がムいま
すから申上げますが備前岡山の大守が國表で伊鷹狩を遊ば
した時早朝から田野を駆歩いて登過ぎよあるまで食事を遊さ
す其時百姓家へお遣入り遊ばし手は空腹でならんから何か持
てど仰つたスレト百姓が驚いて伊飯主様が不意にお出よあつ
て召上りものど仰つても仕度はなしウロウして居た時尾て
来た家來が侍コレ何でも構はんから早く上げろ 百麥飯ば
かりでムいます 侍麥飯でもよい何か箸休めはあいか 百菜
の湯出たのがムいます 侍夫れを切つて醤油をかけて上ろト
底で百姓は無造作よ菜の湯出たのを切り鹽節もかけず醤油を
ぶっかけた鹿末あヒメし物で麥飯を差上げ其時備前様は是を
召上り余程美味かつたと見へて伊意よ叶ひ百姓へお手當杯を

上野谷戦

下し置かれお歸りになり其後伊酒宴があつて其砌麥飯の事を
思出し殿コレ先日農家で食した様も麥飯を持て夫れも青ひ
物と黒ひ水のかつた物がよい侍畏りましたとお請は致し
たが麥飯は解りましたが青ひ物で黒ひ水のかつたと言ふの
何たらふと段々鷹狩の時のお供方よ問合せると茶のヒツ
物よて麥飯を召上つたと云ふことが解つて直又拵へて差上げ
ました殿は伊満足の体で箸を取り召上つたが先日とは違ひ満
腹の所へ菜のヒツ物でムいすから別な味の付け様のあ
物では否かんでもそと味の克いのを持てどの仰せ又拵へ
直して上げてても外拵へ様のあ品故何も御意よ叶ひませ
殿様は御立腹遊ばし殿コレ先日農家で食した様も青ひ物
あいかト仰せの時又側で叩へた侍の中よ才智の者があつて
侍恐作ら上は農家で食したる事のみ仰せられお好みよ相成り

上野合戦

ますがアレハ百姓共の手製もムりますれば不淨を厭ハす肥を
かけて作りました菜故味は優ります上召上り料は不淨を
厭い肥をかけません故味は下ります清淨の品もムいす依
て何卒之をお用ひ下し置かれます様願ひます殿夫れで解つ
た百姓共のは肥をかけたから佳味予のは肥をかけたから不味
と申か苦うまい此上へ一杯かけて來らト器をお差出しにあつ
た何んば何でも其上へ肥をかけたものが上れるものでない俗
よ申す大名馬鹿と云て下々の事を御存じないから随分様々の
滑稽があつたものでサテ宮を初め一同其夜は小原長兵衛の物
置よお明かし遊ばす事よはありしました底で竹林坊僧正は越前
屋佐兵衛を呼んで竹佐兵衛今宵は此所にお宿り遊ばしても
余り不淨の所ゆえ二夜とは恐入右に付明日は淺草田浦東叡山
の末寺東光院へ御案内申度思ふが夫れよと大方官軍は宮の御

上野谷戦

行衛を尋て居らる、故迂潤にか立出もなり兼る依て其方は大儀あがら是より下谷淺草の邊へ参り其様子を見届て来て其度特は書面を認める故是を田甫の東光院へ還すのが第一の要件何分宜しく相頼む佐長りました悉く實地を見て今宵の内立歸り委細申上げる様致します下聽て竹林坊は筆硯をお引寄せよあり短文あれども書面出來致し名宛の東光院ありサヲ越前屋の直へ行ふとする主個の長兵衛夫婦は佐兵衛の姿を見て反つて目立ちましたようからと云つたの町人でも佐兵衛の多し學文もあるし殊に下谷も七代も居り旁々あれは自然と品格よく火事装束に身を堅め余り隙々しき粉装故夫れより百姓姿の方が宜からふと長兵衛夫婦の心盡し半股引よ農桑福祥菅笠の穢あいのを被らせ三河島邊の百姓が下谷淺草の方へ見舞ふでも行ふと云ふ様な化粧にて小原長兵衛の方を立出

上野谷戦

て空で越前屋佐兵衛が東台の方へ赴くも未だ中盤の燒落ちず下谷邊の一体煙に包まれ所々炎々燃上つて居る夫れをも見捨て東光院へ赴き俵骨稜然佐兵衛の丹心を願すと云ふのか話

第二十五席

茲は越前屋佐兵衛は小原長兵衛方を百姓委よ粉装さもく村の者が火事見舞ふでも行くと云ふ様委あれば途中二三の官軍も出遇ました谷めもせず尋ねもせず安すくと下谷の殿小路に出で見れば自分の住居も灰とあり未だ燃える家は炎々煙たち路傍の彼所此所には形義隊の屍骸が斬棄てある有様よ最と物憫れよ見へやうくよ所の者ホロりと集り來るばかり官軍は嚴重に警戒し落人を詮議する様子佐兵衛は我家の燃落ちたのも構はず妻子の行衛も尋ねず平素より孝心の

戦谷野上

深き人あれど今日は母の行術さし構はず其儘よしして人々の
を聴くと中よは宮様の香羽の設國寺へお立退にあつたと云ふ
人もあれば川口の善光寺へお出なされたとも云ひ中よは千住
で官軍に出遇ひ取押へられ先刻有栖川總督殿下の御本營へ御
連申した杯を取どまりもあいなをして居るが三河島村お立退
の事は一人の申す者もあき故佐兵衛は安心をして其儘淺草田
甫東光院へ参り竹林坊僧正の書面を相渡す此時東光院住職も
睡で拜讀し尙明日の御出を御待受けを致すが反つて出迎の人
杯を出せば視線を集るの恐ある故此邊の約束もなし不敬な非
ざる心底を佐兵衛も話し尙思ふと意志を頼み佐兵衛も承知し
て東光院を出たがサテ明日お連れ申すに何かお姿を變へずは
あるまい夫れも付ても一人の思案もゆかず幸ひ芝居町二丁
目の芝居茶屋長谷川と云つて主個は善助と呼び越前屋とは

戦谷野上

悪の間柄此長谷川善助はあかくの才物ゆえ此人へ相破をか
けたら能い分別もあらふと直に長谷川方へ参りました所が江
戸始つて戦さだの何んだの云ふものは講釋よこそ聴て居る
様お者の今日が始めて東台の落人が淺草近方へ来るのよ彼
所でも斬られた此所でも彰義隊が押さへられたの切合つたの
と云ふ噂のみ長谷川は家内十四五人の生計家の若者は様々な
事を聴て来て主個善助へ嘶して居る所へ門口を叩く者がある
故若い者お立出て聞けば伊橋の越前屋の旦那故早速に奥へ参
り若旦那さん伊橋の越前屋さんが妙お姿をして参りました
善何越前屋さんが「ト云ひながら店へ出て来たが不慮から極
の悪意 善こりやア……越前屋さん飛んだ伊心配な事ぞん
ました家からも若い者を四五人出しました夫れでもお怪我が
なくて結構でございました 佐へ「怪我はムいませんか夫れで

上野合戦

安心致しました 善貴殿の事を尋ね申すの且那は未だ立
退いた場所へお出はしませんか 佐私には四五日前から家出を
致して居りましたか 家の者共は何所へ立退きましたらふ
三味線堀の御親類へお立退きよあつて居りますか 土蔵が落
ちまして嘸と察しやします 佐三蔵杯落ちまして母や妻
子も怪我をさなければ夫も事柄掛ひません 善として旦那貴
殿は何所へお出なすつてたか 佐少々貴殿の智慧を假あければあらん事
かあさいましたか 佐少々貴殿の智慧を假あければあらん事
が出来ましたか 佐少々貴殿の智慧を假あければあらん事
で 善へ一智慧あんと仰つてもあか 案内を願いたいの
ども談合で三人寄れば文珠の智慧とやらでまア伺ひましよう
ト夫れから與まつた坐敷へ越前屋を案内し何云ふ譯でふい
すかと問はれて佐兵衛は小聲にあり毎々の話から今日の御況

上野谷戦

宮様を三河島村の長家へお忍ばせ申した事共尙明日東光院へ
お連れ申すも付何か能い御工風はあるまいかと相談をか
れ長谷川の主人も太息を吐き暫く考へて居たが 善越前屋さ
ん今貴殿がお出なすつて四五日前から家出をして居る家の焼
落ちたのも知らんと仰つた時はア一こんな堅い旦那が女狂ひ
か賭事でもあすつて居たかと實又腹の裡で冷評しました段々
お話を聞て見れば手前杯の拜むことも出来ぬ宮様の御供を
あすつて尙其上のことまでも御心配をなされ家の事も構はず
に手前共へ御相談は實又恐入つたもので成程宮様の御姿で白
豊淺草居廻りへお出はせと險呑でふいませしよう斯ふあすつた
ら何で私共も印半天が深山山いませから恐入つた事だが故
様に到着せ申上げ段引腹掛まだ明日は灰を掻き寄せる騒ぎ故
頂川や手拭を冠つても目立ちましようから一層そなすつた

戦谷野上

ら能からふかと存じます 佐成程……是は人の氣も注かない
所で左様から半天其外の物の拜借が出来ましたよふか 豊「夫り
や今直に崩へましやふかお幾人でもいます 佐四人で居らつ
しやる 善「畏りました直に貴殿お持ちなさりますか併しモ
夜が深くて居りますから大きな包み杯を持ってお出ますつて
は面倒でムいませうから今夜は手前共へお泊りあすつて一番
が暗ひたらばお出さいますし夫れに無か疲れでムいませう
故に佐難有ふ存じます勝手がまじうムいませう左様あら仰る
通り一晩願ひます家が内の方へは極内々願ひます 善
夫れは侈心配あさいますお儀しも長谷川の善助を決して渡す
様お事はムいませう 佐「モ一ツか願ひがムいませうのは宮様
が無か口淋しからふと存じます故何か菓子を買つて置て
殿で明朝一所持つて行きたいものでムいませう 豊「且那最中

戦合野上

じや如何でムいませうよ 佐「最中……結構でムいませう 豊
最中あら火事見舞え上げる積りで茲に大きな折がムいませうか
ら是をお持ちあさいませう今から買いますよう」大事を話も聞
ます 佐「左様あらお買ひ申して参りましたよう」大事を話も聞
みました故跡は四方山の話をしあがら飯の仕度あをさせ解
ひて其晩は管呑み管喰ひ芝居茶屋の長谷川へ泊り一番雞を相
圖に立出で小原長兵衛方へ立歸ると云ふのお話

第廿六席

サテ申上げ升是まで演じ来りました東台戦争實記も最早輪王
寺の宮にお立退まで讀つてききました實に荒き風さい厭ひ玉ふ
身の上も今日は度家の納屋にお忍び遊びすと云ふのも誠にお
痛しき事で併し町人ながら越前屋佐兵衛は義侠心も富める男
で長谷川の主人善助と謀り五月十六日の朝未だ薄暗ひ内よ四

戦 合 野 上

人分の股引腹掛印半天を背負ひ菓子折を提げて根岸から三河
島下多古村の小原長兵衛の方へ参りますと前日又替なり悉く
の快晴朝日の登る折長兵衛の井戸の前まで宮様始め四人の侍
侶は東より向ひ斯る中も朝の伊勢を遊ばし居らせらるゝを遠
目で見えた越前屋は思はず菓子折を大地へ投げ其身も俱に泣伏
し如何も僧侶と申しあがら斯る中も忽ち朝夕のお勤を遊
ばす伊心の内如何計りと思へば涙も瀧の如く押流し嘆て居る
様を竹林坊僧正伊勢にたり 竹佐兵衛只今戻りしか 佐退あ
はりまして恐入りました 竹ッテ様子は何じや 佐下谷淺草
近傍の様子を相尋ねました所宮様は香羽護國寺へお立退ま
相成つたの河口の善光寺だのと申して居られます中より官軍
の爲よ押へられ總督の伊本營へお連れ申され杯と云つて居
る輩もムリりませす 竹ッテ見れば東光院へお立退きは心配はな

戦 合 野 上

いあ 佐併しあのか姿にては如何と存じます手前の熱意も致
しまする長谷川善助と申します者の工風では是へ持参致しま
した股引腹掛大紋付の印半天よお姿をお替へ遊ばしたら宜し
いかと存じますトヤ上げた時小原長兵衛も進出て 長夫れは
飛んだ能い思付で其か姿あら官軍も気が付きますまい少しも
早くお召替をあすつたら宜うムいませしよふ 竹イヤ〜夫れ
はあらん 佐へーエ…… 印半天では否けますまいか 竹佐兵
衛能う考ひて見い若し途中まで官軍も出遇つた時一品親王の
宮が半天股引腹掛と云ふ淺間敷お姿よては反つて尊名を汚す
様あるもの一層の事よ此休てお立出がお宜うムりませ又竹笠
杯をお冠り遊せバ反つて人目立ちまする故お手傘をお用ひ遊
ばせ 宮何事も能きよ取計らへ 竹畏りましてございます併
し當家主人長兵衛へ伊勢付をお遣はしを願ひ度存じます 佐

上野谷戦

ッーして下されば私も長兵衛を頼みました甲斐もムリです
宮然らば是を遣はすトお腰又觸れたる銀無垢のお墨平是には
秋の七草の彫物おしてムいませす此品をお墨付として下すつた
決してお墨付と申しても書ひた物ばかりではお墨付とは申さ
れません俗云ふお証據物を下し置かれ怒じ此品が長兵衛方
よあつた計りで小原長兵衛夫婦の者は暫く官軍の爲に取押へ
られ王子の陣營に於て取調を受け余程の難儀を致しました尙
竹林坊も兼てお用ひ遊ばした小銃一挺お遣しよある其内は長
兵衛の家内が心付き古びて居る日傘を持参し是を宮様の御手
に觸れる浄門院浄應院は御出立の御用意越前屋佐兵衛と小原
長兵衛が先きに立ち駆抜けて一々御案内の上坂本の俗に日
除と申す所まで長兵衛はお供をしたが竹林坊よりお腰を玉は
り長兵衛は家に歸る夫れより大恩寺前へ掛り尙靈神社の前を

上野谷戦

通り吉原を左に見て田圃道をお出まありましたが幸ひよして
官軍も出逢はず其日の四ツ半頃東光院へお着よなる竹林坊
は跡より遠見隠れよお供を致しました其内東光院へお遣入り
遊ばした玄關へかゝらす庭の切戸を明てあるのは此所からか
通り遊ばせと云はぬ計り住職の心得で夫れ故直に庭口よりか
遣入り遊ばし椽側の下手に東光院住職は頭を招付けてお待ち
申上げる宮様は椽側よお腰をお据へ遊ばし衆て用意のお洗足
は靴脱石の上よ出て居ります此時浄門院殿は何も是まで盡力
は一方あらぬ故にメテ宮のお御足杯ありとも激がせたらば
満足するであらふと思召し 浄佐兵衛是へ来て上のお草鞋を
取りお御足を洗ひて差上げし 佐長りましてムリませすト恐れ
くお側よ近つさお草鞋を解き脚半足袋共よ是を取除ける浄
門院はお脱棄てよありし脚半と足袋を一つよし懐中より布紗

上野合戦

を取出し右の二品を包み 淨佐兵衛此品は伊墨付として其方
へ下さる 佐ヨ……難有頂戴致します 宣其方は是まで大義で
あつたナト仰せられ東光院の案内にて奥へか這入り遊ばしま
した此の足袋脚半は今以て越前屋佐兵衛方にての大切存し
てござります時又佐兵衛は涙を拂ひ右の品を以て庭口から出
て玄關前の大きな百日紅の前まで来るを向ふより竹林坊か出
に相成り 竹佐兵衛上は伊休息遊ばしたか 佐只今か奥へお
入遊ばしました就きましては私に銘我至極もか墨付を頂戴
致しました僧正よりも尙宜しく伊波館を願ひます 竹夫れい
満足であつたを佐兵衛一寸手を出せト云われ何心なく越前屋
佐兵衛の手を出すと其上へ小判十枚を乗 竹佐兵衛此四五日
は賊の骨折りであつた此品を遺す故モ引取つて宜しいト
云われし時佐兵衛満面朱を注ぎ突然其小判を掴んで竹林坊

上野谷戦

の横面へ叫掛けて伊氣勢を四邊を拂ひ東光院内へ佐兵衛万丈
の氣炎を吐くと云ふのか話

第二十七回

佐ヤニ此寒々坊主奴人を何と思つて小判十枚や十五枚を自己
の手へ戴せやがつた 竹是ハ不禮な奴じや四五日の日を費や
さして居る故其代として遣はしたのを拙僧の願へ投付けると
は如何も文盲の町人とは申しあがら不禮な奴じや 佐何文盲
の町人だと……コレ家は洗湯杯と云ふ職業こそして居ても加
賀や越後から来た三助上りの佐兵衛とは譯が違ふぞ能書を云
ふ様だがモ下谷よりは儼しで七代少々は財産もあり親達のか
蔭で文字の少しは知つて居る男だ 竹其文字を知つて居る
其方あら何故彼様な鹿暴の振舞を致す 佐しあつて打殺し
てもユラんだが性命だけは助けて置く 竹コレ何で左

上野合戦

様も立腹致すハハハ十兩の金子が不足と見へるも何程這せ
ば宜しいか其方の申す通り道すであらふ 佐何……ヤエ此
坊主奴……十兩が不足だから怒たと思ふのかコレ金で云たら
千兩二千兩呉れても難有と云ふ佐兵衛じやねエ金銀を夫れ程
貴ひ物と思つて居るか魯元道の鏡神論も羽なくして能く飛
び足あくして能く走り得るものは先よ立ち失ふ者は後に付く
と書染めた事を知らねへか此章魚坊主奴自己は家は焼けても
殿が落ちてても大切の母の行衛も妻子の行衛も捨て置てお痛まし
いと思ふ心から宮様のお供をして彼所此所と駆歩たんだ今お
草鞋の紐を解て上げた時又宮様のお顔を見奉れば一兩日又至
極お疲遊遊ばした伊様子雲井よお育ち遊ばしたか方が時節と
は申しあがら新くまで伊苦勞をなさるかと思ふと胸が一杯よ
あつて靴履の石へ涙を溜た佐兵衛だ夫れを伊見なすつたと見

上野合戦

へて此通りか墨付を下すつたり其上宮様のお言葉までも聞い
て難有と思ひ妻子の事さい忘れて居たものを金を出して是を
持つて歸れとい何の事だ人の噂よ竹林坊僧正の比丘の行ま
でかすつた天台宗に稀の名僧だとか高僧だとか云ふが此佐
兵衛の眼から見りや生奥坊主の才地坊主門へ立つて一文つ
貰つて歩く願人坊主も劣つた奴だモロ口を聴くのも否や又
あつた下眼の色を替へて佐兵衛の立腹落散る金を見向きもせ
ず今東光院の門を出様とするまで始終を見届けてお居て遊ば
した竹林坊僧正 竹待て佐兵衛其許の心底も見へた其志あら
安堵致した宮よ代つて竹林坊より相頼む仔細あり何ぞ此所へ
歸つて呉れ 佐へ……心底が見へたの頼むのと町人の費
僧方の相談相手よありません故金を貰つて尋ぶ様お若を尋
て伊用を仰付られたら宜うましよふ 竹其金子を出した

上野谷戦

の内實ハ其方の心の裡を探つて見たのじや其謀ハ昨夜宮より
内命のありしハ是まで上の伊新禰僧野州柄木の大平山遠淨
院ニ滞在する慈雲律師の許へ宮の伊眞筆を持参する役是ハ僧
侶でいけず又侍でハ道中不安心今官軍續々ど入来る今日町人
あはら其方の膽力あら速に使も働まるであらふと夫れ故金子
を以て試めし見たりしに思ふよ遠ハす大丈夫の其方改めて宮
様へ目通り仰付けらるゝ故拙僧も同道して参れ 佐、エ……左
山遠淨院律師様の所へ参りますのでムりますか 竹、参つて
呉るか 佐、難有ふ存じます一日でも宮様の伊名代を勤めます
れば思ひ發す事ハムいません何ぞ仰付けられて下さいませ 竹
然らハ是へ参れ併し佐兵衛其方は口の悪い奴じや拙僧を指し
て何だえ章魚坊主だの才地坊主だのとは余り酷いでないか

上野谷戦

佐、實ハ恐入りました腹立ち紛れ目も暗み前後も顧みず故
言致しまして意外の悪口をした段何卒お忘れ下さいませ 様願
ひます 竹、ハッハ……ヤ、夫れこそ拙僧が見立御名代を勤め
させる佐兵衛いざ同道を致せし其儘東光院の台所より兩人足
を洗ひ直し書院へ通れば正面ハ輪王寺の宮お着し相成左右ハ
ハ淨門院淨應院の兩僧少し下つて東光院住職其外僧侶一人も
見へず是ハ東光院の計ひよて四五名の僧も用事を申付け遠方
へ還ハしたるも他見を憚るが故只十二三ある小坊主二人是
ハお廊下ニ控ひ万事の御用を達します者と見へるサア竹林
坊僧正ハ御安着の御喜びを申上げ尙佐兵衛も目通りありお盛
侍と持つて柄木の大平山へ参る途中身ハ災難が振極ると云ふ
のお話

上野谷戦

却説竹林坊僧正の御紹介より改めて宮様御目通りを仰付ら
れ其砌お認めに相成し慈雲律師への御書面又竹林坊よりの手
紙是をお渡しし相成りお手當の金子を下し置れたのを佐兵衛
の御書面だけを預り金子は僧正のお手許へお返し申上げ其時
宮様お手から御菓子に佐兵衛へ下され同人の其喜び萬金に優
る思ひをさし一時お別れを告げ退散致し最も七日以内御使
の勤むべきの約束をさした此佐兵衛の柄木大平山へのお使の
事の後席よて委しく申上げます茲又五月の十六日の夜は東光
院へ御一泊し相成り交したのが何分手薄なる所ゆえ御心も落付
かず依りて市ヶ谷慈昌院へ御出ま相成る御心組慈昌院の住職は
多々羅良榮と申して後又日光満願寺の住職もあられた人で此
市ヶ谷慈昌院と云ふと余り人が知りませんが市ヶ谷の癒寺と
云へば世間で能く存して居ります是は紀州公のお裏方の御書

上野谷戦

提所で是あらば御安心と浄門院浄應院も思ひ東光院住職も是
へお移し申す事を御勧め申上げ然れども御越し相成るべき
道筋も付十六日の夜暫ばく一同の僧侶も額を集めて御相談中
も東光院住職の東拙僧の考もは下谷本郷の邊は官軍様々
と居りますれば大石を脊負ひて闇に臨む様な者で一厨當寺よ
り未明に立出吾妻橋を経て本所深川を通り永代を渡り戻し
尙鉄砲洲より芝又出で大廻り廻つて市ヶ谷よ移出になつた
ら如何でムいます 浄門ヤ夫れ余り迂遠を話一厨殿前通り
より日本橋へ出た方が戻つて往來の茂き所故目立ちますまい
かと思ひます 竹イヤく左様廻り道をして参らふより一
層是より下谷に出て東台の焼跡を見て尙本郷より小石川水戸
屋敷前を通りお堀側を市ヶ谷へ参らふと拙僧の思ひます 奥
夫れ余り大膽なお話で余所の格別上野近傍の通切れますま

上野合戦

い竹左よあらず御門前の町人等宮様のお顔を知る者もな
く好しや官軍が居ればとて將さか宮が伊通行にあらるとい心付
くまい俗に燈台元時しとやらで左様致さうと存するに違ふ竹
林坊の意見が行なれいよ十七日早朝東光院伊出立になる
砌是まで召されたるか法衣も東光院住職も下され又東光院の
袈裟法衣の余り目立たぬを召させられ各々日傘をさしてお立
出に相成る東光院住持も俱にお供を願つたのを竹林坊の利衛
を説いて謝絶し自分と俱に僧侶四人今寺を出ると門の脇に竹
で居た町人体の者二人一人の深い笠を冠り一人の手拭を吉原
冠りよあし勿論兩人共草履穿て伊出家達が出る一人の先へ
行き一人の跡から付て来る様子竹林坊もハテ怪しい奴と思ふか
ら氣を許さず僧侶が早足歩けば早く歩くと僧侶がフツツ
歩けばフツツ尾て来る様子其内上野山下へ大膽にも掛り脚

上野答戦

橋の邊へ來ると大層な人が所々立ちたかり一昨日の取合の
話のみ竹林坊の彼の者をマコ——とも思ひ又二つよの何か
噂の内は珍説もあるかと其人込の中へ冠物もせず立居て
様子を見くと甲「何も大變な事でもいましてね 乙「私あんざ
ア朝湯から歸つて膳へ向ふと鉄砲の音がしました故吃驚して
逃げました九で答も出せませんで悉皆焼けて仕舞ひました
西「夫れでも手前共の田舎も親類がムいまして故軍等や長持の
田舎へ預て置きました故夫れだけ助かりました 甲「色々事
を申します宮様何したんでしやう 乙「何でも私の聽いた
のじや千住で官軍も押へられたのが本統でムいましてしやう 丙「
併し伊山の覺院様は山王台に圍て居たそうです其後何所
へか立退て仕舞ひましたエライ坊さんあつたじやムいせんか 乙「
人京都から來たエライ坊さんあつたじやムいせんか 乙「

上野谷戦

ユ、ありました 甲、何てえか方でムいしました 乙、彼ノユ、何と
か云ましたよ、ケナン坊でいあし、ソナン坊であし夫れ、竹林
坊、護國寺へ入らしつて居るそうぞムいます」ト、縁々の話を竹林
坊の胸中、可笑しく儂しの事を云ふものだモ、先刻の仁、退散を
町人と云ふ者、色々る事を云ふものだモ、先刻の仁、退散を
したらふと振願りて見れば未だ二人とも附て居る様子又々仲
町の方へお出よされ、前後から尾て来るの、行先きを突留め
様と云ふ者、相違あると思召されたナレ、如何ども致方もな
い故、切通しを上がり右手、加州の盲目長屋を見て本郷通りへ
出様とする、俄、降出したました雨、車軸を流す様、大降り足
よ、倍倍も困りました日傘でムいますから何分、大雨を凌
ぐ事、出来ず、ト云つて金銭の持合せが、あつても出家と云ふ者

上野谷戦

下駄や傘を買ふの、誠、目立つ者で、其譯、何所へ参つても
寺の、おい所、ムりません、仮令、宗門が違つても、俄雨で難儀致す
から、雨具を借りたいと云へ、用達の、お僧侶の習慣、夫れ故、雨
具、杯を買つて居ると、曾云ふ所から、目を付けられて、あらんと
竹林坊も、前後を思ひます、故、雨具を買ふ譯にも、ゆかず、雨、なす
く、強くありました、此、大雨だから、二人の、モ、行つて、仕舞つた
かと思ひ、見れば、雨、打たれて、尾て来る様子、其内、兼安と申す、小
間物屋の前から、向ふへ、還入る、横丁、左へ、行けば、本郷の、登、岐、坂
より、水戸様の、屋敷前へ、出る、往還、此、兼安の、向、横丁へ、還入る、左側
より、瑞仙院と申す、寺が、ムいまして、此、寺の、四、五、日、前、までの、官軍の
營所にあつて、居た、寺で、ムいます、大膽、も、此、寺へ、お、還、入り、遊ば
し、雨宿りの、一條、から、尾て、来た、二人の、者、の、如何、なる、人物、で、如何
ある、要件、あつて、斯、まで、四人の、行、衛、を、尾、行、して、突、留、め、んと、する

上野谷戦

や一寸此所等で休息して申上げます

第二十九席

茲も四人の僧侶の雨の難澁をあし殊も先刻より尾行せる人物の何者あるか解りかね暫く兼安の樓下へ行んで居られ此時浄門院殿は竹林坊僧正の袖を控ひ小聲あり浄門院殿は此た事がふれます此向横丁の瑞仙院の住持の拙僧未た一面識も致さんが圍基を好み又天神下の夜雪菴の社中で發句杯を好む由を聴居りますれば夫れ等を種として暫時瑞仙院で雨宿りをし次第又依れば雨具を借用致さうと存じます竹夫れは能い考へじや仮令昨日までの官軍の營所もせよ夫れ式は盡く今日でもない雨宿りを致す内彼の者も何れへか退散するであらふ下雨僧御相談の上大膽も瑞仙院に入参りました然れども浄門院心中より何か住職が不在で呉れぬと思ひあがら

上野谷戦

頼むくど申し入れしよ二十才計りの坊主出来り玄關も手を突き坊何所からか出よ相成りました浄住職の居でかね坊相相淺草橋場まで参られましたが夜分でのふての戻りません淨めた……坊何をなすつた淨何……まア宜しい拙僧の市ヶ谷自昌院々中の者だが毎度住職との甚の友故今日ハ法類を二三同道して一甚願ふと思つたが不在と認て疑も念の至り其内戻りますか坊何も夜分でのふての歸られませぬ淨相替らす下手を發句を暇を費して居でか坊すまい淨相替らす下手を發句を暇を費して居でか坊ます淨まア免れ上がらふ下遠慮もあく書院へ通り各々も此所へ當住職の手前の熟懇ゆえ決して淨遠慮あくお通りなさいどの案内に宮様始め三僧共書院へ通る院内の者何れも呆氣も取られ無遠慮も淨出家だと思ひあがらも住職の近し

上野谷戦

い人でもあつての不敵に反つて叱らるゝ甚と茶を出し菓子
杯を出す悠々と茶を呑み菓子を喫べ雨止みをして居たが何分
止みそふもあし様子故 淨住持の居らんのも永居をするのも
宜しくあし歸らふが傘を二本貸して貰ひたい相傘で参るから
何れ自昌院より届けます 坊長りました「直又二本の傘を立
關脇へ出す四人の僧の其儘歸らふとする故留守居の者の淨門
院の袖を捉へ 坊少々伺ひますが今又師の坊が戻りました時
か名前を伺つて置きませぬければありませぬ且淨法頭を三人
のか名前を伺ひ度存じます 淨別に申さんでも自昌院の若だ
と云へば解るでいなしか 坊でいふますが念の爲でいふ
すから認て置たう存じますト料紙を取出すサモノ淨門院殿
も迂闊な名前も書けず候しお書て遣るから茲へ筆と紙を出さ
さいと云ひれて坊主の左様なら願ひますと筆紙を渡す淨門院

上野合戦

殿サラく 梵字で書て 淨是が我々共四人の名前だ 坊主
の梵字でいひ升る私より一向解りませぬ 淨お前方の梵字の
稽古をなさらんか 坊主だ師匠が教へて呉れませぬ 淨夫れ
は不都合だ坊主が梵字位讀めんと云つては大きき困ることか
あるたらふか前又は讀めなくとも住持又は讀める故師つて來
たら此僧四人が宜しく申したと告げあさいト云ひ乘て二本の
傘又四人の僧侶悠々として出で行く茲又中上げます端仙院で
淨門院の書ひて行つたを院内の者が八九人も集つて色々を
考へて讀んで見たが何も解り兼ねて居る所へ端仙院住職が戻り
ましたから早速此ことを話すと和尙も不思議を顔をして 端
僂しは自昌院も懸念者はあし 坊主れでも師匠様の甚の好
き事や發句の好き事や能く存じて居られまして其上書院
へ通つて四人で茶を呑たり菓子を喫べたりして暫くお待受で

百四十六
 止まらぬものでムいすから傘を貸せと仰いました故二本御用
 書で遣ると仰いまして現場で認めてお歸りなりました所が
 書たのを持つて参れ坊畏りました先刻梵字を書いた端紙
 を端仙院の前へ出す住持の暫く見て居たが端コレは是の
 何だ坊梵字でムいすは師匠さんに讀めませんか遺失
 敵事申すも願めんのでないが是を認めて行つたのか
 坊へ夫れが名前だとうで端何ぼ其方共が無智者にして
 ても世の中よの随分人を馬鹿にした奴があるものでは名前
 でも何でもあり坊へ……何と云ふ梵字でムいすは
 讀むのも馬鹿くしい是は世の流行歌でヤイトコセー、ローイ

ヤナトと云ふことを梵字で書いたのだ小へ……人を何
 だと思つて居るか……ト果ては銘々笑ひにありましたが端で
 調ふれば宮様か立退の際即智で淨門院取の筆だと云ふ事を知
 れ端仙院の住持が大層愛蔵して居ると申す事は後の話
 でサテ四人の僧の壹岐殿坂まで來ると例の二名がバラバラと
 竹林坊僧正の前へ來りました此時竹林坊もヤナトと思召しお
 身構ひを遊ばしたスルト小聲にあり先刻よりお心遣ひと存
 じまがら他聞を彈るが故申上げ今人も通らぬ様子故御安心
 の爲め申上げます我々の師匠伊場軍兵衛の申付よ昨夜よ
 り東光院門前へ登固を仕つた鹿島新之丞でゐる正田二郎で
 る此上市ヶ谷まで御供仕まつる故御安心下され度と申上げ是
 より兩雄付添ひ市ヶ谷壺寺へお忍び遊ばすと云ふお話

上野谷戦

去る程、慶應四年五月十七日の夕刻、無事、輪王寺の宮より、浄
門院淨應院竹林坊僧正と外より、正田二郎鹿島新之丞の兩人、余所
ながら、御供え、隨い市ヶ谷自昌院へ、お着に相成、住職多々、羅良榮
の兼て、御待受け申したる位あれば、御居間、其の外の手入も、出来
致し、清らかなるお坐敷、御忍ばせ申し、御居間、出入する者の
住職、良榮と外にお付添ひ申上げた三僧のみ、院内の者にも、知れざ
る、御隠まい申し、其内、追々に、宮様御家來、聞傳へて、自昌院へ來
ると、雖も、大抵、御出さき旨を、以て、お歸し、相成り、中にも、家老
鈴木安藝守蒲生將監等、御手元へ、差置れ、茲で、初て、宮より、少々
伊安堵の体が見へました、其他、東光院より、別れ申上げし、越
前屋佐兵衛、豫て、仰付られたる通り、栃木大平山、逆淨院僧正の方
へ、宮様御真筆と、竹林坊僧正の手紙を、御届け申上げる、大役、此、慈
雲律師と云ふ、伊方の宮様、お歸依あされし、伊所、御信にて、致も

上野谷戦

道徳堅固の、伊各僧、よて、ありしも、借、三十四才、よて、化滅され、
も、今、東京で、こそ、余り、人が、知り、ません、が、野州上州常陸の邊、で、
専ら、障の、高い、人で、此、お方、の、人を、助ける、が、爲、橋の、おき、所、へ、橋
を、架ける、のが、お好、で、我、生涯、石橋を、架ける、と、言、々、仰、せられ、し
が、年、若、よ、して、化滅、あ、され、し、も、既に、三十七、橋、まで、下、總、常陸、に、
残、つて、居り、ます、此、橋、と、云、ふ、もの、の、常、よ、知ら、ず、く、く、進、つて、居
れ、何、でも、お、い、様、お、物の、兩國、あり、永、代、なり、橋、錢、の、格、別、一、々、
船、で、往、來、す、れば、何、の、位、不、便、だ、か、知、れ、ま、せん、五、代、將軍、の、母、君、の
女、で、居、て、一、位、の、位、よ、昇、進、遊、ば、し、人、呼、び、一、位、柱、昌、院、様、と、申
上げ、ま、した、其、お、方、が、伊、昇、進、遊、ば、し、たら、喜、び、よ、何、か、慈、善、を、遊、
す、れ、積、り、で、時、の、老、中、を、お、招、き、遊、ば、し、何、か、人、民、の、喜、ぶ、事、を、し、て
還、り、し、度、が、何、し、たら、天下、の、人、民、が、喜、ぶ、であ、ら、ふ、と、お、尋、ね、の、御
秋、本、但、馬、守、の、江戸、市中、へ、時、の、鐘、を、澤、山、よ、鐘、させ、是、を、洩、さ、る、様

配り申しましたら人民も喜びましたし、申上げよりの時の鐘の既に寺々へあれば左程不便と云ふ程にも非らざるべし夫より永代と兩國の間が遠く茲に一橋を架けおぼ定めし人民の喜ぶ事でもいまいしよと申上げ是も貸成する人々も多く遠く桂昌院様も伊同遊遊してそんなら是で架けて遣れど仰つて毛糸の巾着から出しまなつた金で指したのが新大橋でいいます將が桂昌院様が毛糸の巾着の持ちあざるまい此新大橋が出来て本所深川の者も又此所から参るものも其便利の一通りでいふりません彼の新大橋の架つた時、萱場町の植木店も居た其角ありかたや、或て踏む橋の薪下云ふ句を致しました實に其角杯の額句を讀まして人名人あもので知らず、渡れ何でもないお心して渡れば橋は便利な物にいません其橋を今でもいそん事も出来させ

彼が橋新前杯の随分小便で問敷を計つた馬鹿者がいまいし、彼がア、おん、彼奴の小便の長ぐいせ兩國橋を行つて来ても未だ他無きあらさ、... 勝か夫な長いのもいいますまい、サア橋の語より飛んだ余事を申上げました慈雲律師の昨へいよく五月十九日の日に越前屋佐兵衛の参る事と決定し半股引と襦袢一枚、人足と云ふ指へて持つて行く思杖の中、節を抜いて其中へ宮様御墨付と竹林坊の書面を巻て入れ中頭で留めをしてある紙へ貼付しして穿て行く足袋の中へ入れました故金子があるとの思ひれせん麻の財布と銀を四五百入れて是を思杖の先へ縛付け夜明け前に下谷を立出て千住の大橋へ掛るまで何事もなく参りました今大橋の様子を見ると橋板の中を引上げてあり殊に橋の袂の官軍の番兵、哨線を取つて居りました

是の備前岡山の池田侯の一隊でムいませ其殿重さ事官に夫れ
のモ一想像外でムいまして又橋脚も彩騎隊とも見へる者が二
人縛られた儘よして寝かしてありまする様子佐兵衛の大膽も
も關門の前を通抜けんとするをコリヤと一聲呼留められ茲に
一通りの取調も對し佐兵衛頼智を以て官軍を籠絡し去ると云
ふのお話

第三十一席

千住大橋の關門を嚴重に堅めて居りまするの備前岡山池田
侯の手で隊長一名伍長兵士等も三十余人各々鉄砲を組みし
の實も目を驚す計りあれども強膽の越前屋佐兵衛前申上げた
る通り人足と云ふ姿で息杖を擔ぎ通らふとする 官「コレく
人足 佐へー 官無暗も通つてのあらん取調るから茲へ來い
其方の官軍へ抵抗した東叡山の落人だらふ 佐「ハッハ……ハへ

「旦那さん夫れでも侍と見へますか夫りや頼有ふムりまするが
能くか改め下さいまし 官空笑ひ杯をして徒暮殿るも 佐徒
暮殿るあんて何も致しません」ト恐るゝ氣もなく官兵の並んで
居る前へ持つて居た息杖を大事そうにすれば目立つと思ひ無
造作に投り出し隊長の前へ腰を屈め 隊「裸身よあれ 佐「畏り
ました」ト着て居た襦袢を脱棄る官軍の其襦袢の腰杯を解て見
たが書類杯のムいません 官「下帯を取れ 佐「能くいろんも事
を仰る親子諸共裸身よするんですか」ト下帯を取り振つたが素
より何も出る筈のさし只足袋を脱げと云へれると大變だと思
ひ心配はするが顔へも出さあいのが流石は竹林坊の見立てた
程あつて大丈夫の鉄腸隊長も余り速かよ裸体よなり下帯まで
解くし少しも舉動も怪むべき點がムいません故穿て居る襦袢
足袋迄の氣の付かんのお佐兵衛の幸ひ近くへ呼んで袋を刎ね

戦谷野上

髪の様子を改めたが素より町人の事あれば少しも怪む所ある
い故襦袢を着せ仕度を直させ 隊其方何所へ参るものだ
佐私越ヶ谷中宿殺渡世仲屋定次郎の甥でムいまして仲屋の
娘が下谷竹町の湯屋へ縁付て居りまして其方へ此春から参つ
て居りました所十五日の戦さで湯屋の九焼となり居所の
越ヶ谷へ歸りますんで 隊此財布の中は錢が三百十六文しか
無いが外も持合せがあれいか 佐外も錢がある位あらこん人
足の様も姿を致しません此錢も助けやうと思ひます故是から
問屋場へ行つて荷物を撥ひて行く積りでムいませす 隊其方何
いと申す 佐私佐助とまします 隊何オじや 佐三十四で
ムいませす 幾才位見へませす 隊黙れ幾才見へても構ふも
のか暫く其所へ扣へて居れ 隊長も外も事務もある故其方を
取扱ひ扱して態と佐兵衛を拾置く佐兵衛も茲が六ヶ敷所を思

戦谷野上

ふから緩くりと落付て兵士の居る所へ来り 佐皆さん御苦勞
隊でムいませす 兵コレ 無暗も此所へ来ての否かん其方の
未だ調濟よあらぬ故アノ控所に待つて居れ 佐ソ てもム
いましやふが朝飯を喰はずよ来たんで腹が減つて来たした
貴殿方の辨當でムいませす 兵コレの朝の辨當だ 佐へ
エ三度 辨當じやあ飽きなさるたらふ 兵夫りや飽きる
佐何でムいませしようか飽きなすつたものあら一本蔵かせて下
さいませ世間の人もソ云ひませ徳川の脱走杯どの違つて
官軍隊の情が深ひから腹が減つた云ひや辨當を呉れたり錢
があいと云へば小使を呉れたりするそうだが一本振舞つて
下さい 兵否やよべら 口鏡奴だ 甲君何せ喰はん辨當を
ら此町人よ還り玉へ尊公の最前から呑過きで飯が喰へんを云
ひしつたぢやあいか 佐是の 色々を計らい下さいまして

上野谷戦

難有ふ存し升下... 百五十六

上野谷戦

涙を名前が付徳川の家... 百五十七

上野谷戦

是で一先安心と心中喜び是から越ヶ谷の中屋定次郎方へ赴くより栃木の太平山へ赴くと云ふの物語

第三十二席

越ヶ谷中宿の中屋定次郎と云ふの全く越前屋の親類で佐兵衛の家内の中屋の娘であれ又別段の間柄左れば是へ行つて万事を頼み本街道を栃木迄の危ぶなれと思ふ故何所でも裏手を行く積りで其日八ッ頭越ヶ谷中宿仲屋定次郎も面會し色々相談をする定次郎も日頃より越前屋の義侠心を知つて居れば止めもせず賛成もした何分是から先きの官軍の警戒に重にして是非夜道を行かねば古河の遊船場まで行けず云つて案内をして行く人足も恐がつて居れば急ぎ行く者もあちらふし是非問道を行くのみ佐兵衛一人で道も知れず定次郎と二人思案暮て居る所へ幸ひ定次郎と崩詰の友達で越ヶ

上野谷戦

谷宿問屋場役人島田五郎右衛門と云ふ年頃五十四五にある仁が参りました定次郎の幸ひも此五郎右衛門に相談を掛けたのは是も平素互に氣象も知つて居る人故話をし見ると早速の承知越前屋佐兵衛も近つきもあり尙人足を連れて来よう程あく茂助和吉と云ふ者共を連れて参りましたのがモ一暮六ッを打ちまする時分五郎屋さん越前屋さんそんなら行て来ました此二人の御心配あくお連れあさい此五郎右衛門が保証を致しますから佐難有ふ存じます是で首尾よく使が歸りますすれば必ずお禮も出ます様致します五郎もお禮もか出があくとも貴殿の家藏を棄ても宮様のお側へ居てお世話をなさらふと云ふ大丈夫の方其お頼みを認て人足の二人位出したからと云つて手柄もありませんが是は貴殿の御氣象にするので云いますから御心配あくお連れあさい茂助和吉其

上野谷戦

方違も自己が頼みだから此旦那をお連れ申して裏道を行つて古河まで屹度御案内をしる 茂張りよした問屋の旦那様の仰る事で問違をくお連れ申します 和儀しも不慮からお世話なる島田の旦那殿の云わつしやる事だ死んでも能えと思つて参りました 五手前達が言云つて下さりや旦那様へ對して己れも能えと云ふもんだ少しも早く仕度をして五郎右衛門の勤めも定次郎も用意の握飯佐兵衛に糸立を着せ二人の人足に一張りの提灯を持たせ途中で買うことも出来ぬ故蝦蟇も澤山又用意し大きき瓢箪も水を入れて持たしたの定次郎の信切佐兵衛の五郎右衛門より一禮を述べ定次郎も黙れて越ヶ谷宿中程から裏手へ道入り二人の人足が信切も案内をして呉れ其代り廻道をして参りまする故一里の所を一時も掛る様も歩き候と致しますから夜明方よりなりやうく 古河の渡船場へ行くか

上野谷戦

り見れば此古河の土井大炊守の御領分で土井の素より官軍をの中央へ圍め端柯を出して一々本船で吟味し江戸の方へ来る者お構ひませんが日光の方へ行ふとする者人物職業の如何を論せず嚴重に取調をする由茲で佐兵衛も當惑したがモ一夜が明けて見れば案内の人も入らず持合せの金一分宛を兩人へ遺りして歸し自分一度通つた事のある道を下りて下総國葛飾郡坐和の渡船場を越す積り此坐和を越しますると丁度初木の裏手へ出て諸宿富田を通れば直ぐ大平山へ登れる所故廻りだが坐和へ廻つて来ました丁度渡船場へハモ一問もあからふと思ひ乍ら芦園張の園子茶屋へお茶を一杯お呉れ 老拜々畏りま居る所へ道入り 佐お爺さん茶を一掴お呉れ 老何も出発しした今旦那さん湯が沸くと能え茶を入れます 佐何も出発し

で飽えから何か食物はあいか少し腹が減つて来たが 老左様
でムいませす別よ上げる様も物もムいませんが自慢の團子がム
い升 佐自慢をする位なら佳味からふ二三本お呉れ」ト團子杯
を跳へて居る所へ年齢五十格好よて白髪交りの大徳大辨慶の
軍衣よ二重廻りの三尺帯下げ煙草入も伊勢の坪屋で是も金物
も判れて仕舞ひお獅子バクくをして居るのを紙拵で輪を掛
け真名板へ花緒を掛へた様も大きき下駄を穿き是も茶屋の前
へ来るも老翁は見付け 老是と親分さん何所等へ今日もお湯
くありそうでもりますすまア一吹上つてお出ささいまし 親一
吹遣つて行ふか」ト向ふの腰掛よ居あがら佐兵衛の様子を
く見るのが何も只物でない故佐兵衛も心中よ否お奴が来た
とは思ひながら 佐お爺さん此團子かい自慢のは 老ハイヤ
うまア召上つてとろふじろ江戸よもこんさ佳味團子はありま

すま」ト自慢で出した巻團子佐兵衛は空腹ゆえ其儘口へ入れ
ると巷は苦がい様な酸い様を實へ喉へ入れ兼る品物思はず吐
出し 佐是りや成程自慢を云つても能え儂しや酒は呑まね
で甘い物は好きだが此位の物は初めてだ」ト笑ひあがら残つた團
子を脇に居た犬よ投げて還る様子を見て居た彼の者がズカ
と佐兵衛の側へ寄つて参りましたが果して是れ如何なる事を
云ふか次席を俟つて知り玉へ

第三十三席

佐兵衛は何分咽喉へ這入らあいな様な不味團子ゆえ口へ入れた
のは吐出し余つたのは犬よ喰ひせあがら向ふの腰掛よ居る人
を見れば其人も煙草を飲みあがら始終目を付けて居る様子何
だか薄氣味悪く 佐お爺さん團子は幾等だえ 翁へ一本四
文でムいませす 佐ッー 見えりや團子の代だよ是は茶代

戦合野上

だよ、天保錢二枚を置いて眞赤く出て行くスルト此か爺も
煙管を仕舞ひ襦をからげて跡から追ひかけ来る様子故佐兵衛
は急がふと思へど夜旅はして居るし腹は減つて居るし足が進
みません、スルト、チー、と聲を掛けて居る故今は逃ん所と
立留り 佐か呼びあさるのは私でムいませるか 親か前さんだ
が何所の方で何所へ行きあさる 佐私には用事があるつて余所
へ参りますすが別な貴殿も開べられる様を怪しい者ではムい
せん 親開べる役を以て開べられるから一應かあいな内は通
ふす事はあらねい 佐へ、エか役人様でムいませるか 親役人
様と云ふ程でもねいお八洲の御用を聞て居るものだ、一休か前
は何所だ 佐私に越ヶ谷中宿定次郎の甥でムいませるか 親
申します 親何所へ行きあさる 佐主個が病氣でムいませるか
ら大平山へ代参の者でムいませるか 親お前は越ヶ谷よ始終居る

戦谷野上

さるのが 佐左様でムい升 親コレ偽りを云ふか最前から北
方の様子を見て居れば園子を喰かけて吐出したたり茶代だと云
つて天保の二枚も置て来たりするが百姓と云ふ事はねえ況して越
味物でも一端口へ入れた物を吐出すと云ふ事はねえ況して越
ヶ谷邊の町と云つても半分は百姓だ夫れは園子を吐出したり
天保錢の二枚も置いたりするのは怪しい奴だ、素直に申上げろ
と氣目付けられて越前屋佐兵衛も返答は困るし、一所詮逃
れぬ所と考へ持つて居た杖を左の手で差上げ大聲よて 佐下
郎大切の御持参の者よ不禮を致すと許さん、ソ、事か知れ
て見れば、一隠す所でもない僕しは下谷の竹町に住んで年來賤
業の湯屋渡世はして居ても此度か見立より上野輪王寺の宮
のお墨付を持つて逆浄院慈雲律師の方へ御名代を勤むる者で
不淨の其方繩杯をかける腕が曲ると云はれて杖の親爺は

戦谷野上

下駄を脱ぎ大地へ兩手を突き頭の上へ程まで下り 親これ
は忍入りしました貴殿が竹町の越前屋の旦那でムいますか私は
商買は馬喰で八州の御用を聽て居ります長五郎と申す者でム
います飛んだ事を申上げて忍入りしました 佐へー馬喰の長
五郎さんと云ふ人よ私はお近つきはムいませぬ 長貴公は御
存じムいますまいが私共の村から下谷の上野町の賀屋へ奉公
へ行つて居た女でムいました十五日の戦争で戻つて参りま
して其女の話を竹町の越前屋さんはあれが本統の男の家藏を
失つても構はないで宮様のお供をして行つたそうは是が三百
年も経て本でも残つて居るか言傳ひでも残るよ相違ない人
は一代名は末代と村の者よ話をした時私も劍に聞て居まし
て同じ人間も生れながら本統の家藏と云つたら動物を取扱ひ
人の目を眩まして三兩の馬を五十兩百兩も賣付けのを手

戦谷野上

柄の襟よし片商買は八州の目明して四人の穴を叩て幾等かの
銭を取るのを樂まして是まで居たが五十七モ一活た所が二三
年同じ事なら一人名前を殺せぬ迄も悪い奴だと云はれぬ機氣
が付いたのは一昨日の事今寺参りから歸つて来て老爺の茶屋
で一吹して貴公の素振りよ目を付けたのも俗よ云ふ商買柄か
聞き申せば越前屋さん此殿しい中を宮様の御使よ律師様の所
へお出なさるとは實よ此上もあいか骨折りた夫れ故今此通り
懺悔を致しましたが是から何所へ行く積りでムいます 佐
殿が八州の目明してありながら一信切よ仰つて下さるあら
明してお話を致します私には是から坐和の渡船橋を越して行く
積りでムいます 長旦那未だ伊不案内だを見へます古河は
士井様の官軍で彼の通り此邊は秋元但馬守様の伊領分其秋元
が官軍故坐和の渡船橋は河中へ船を集め其殿重き事は古河

上野合戦

一層優れる位也坐和は越せませんよ 佐三郎……そんなら
坐和も堅めが付て居りますか 長五郎堅めが付てありますか
ら往來手形を持たなければ所の者も通れませんが併しお目よか
つたが何より幸ひ此坐和村の名主は山口辨藏と云つて誠
エライ人で組頭も喜内と云ふ人がありますが大の徳川殿
負此名主殿願んで往來手形を拵へて上げましたやうから私と
一所も名主の所へお出ささいと無理も佐兵衛の手を取り名主
山口辨藏の方へ同道をいたしましたる後の話は此等で一寸筆休め
……

第三十四席

人の性は善なるをやらで實不然らんか如何に狂不逞の徒も
夜間四脚は既家賃として人語なく獨り既社を願は必ずや良
心も苦められん左れば目明しの長五郎も此頭物に取じて居る

上野谷戦

所へ越前屋の義俠心を飲慕し往來手形の事も付き佐兵衛を同
通して坐和村の名主山口辨藏方へ入り來り門の内も佐兵衛を待
たせ 長旦那の家にお居でムいませるか 辨長五郎何だ今時
分よ 長エレ——事が出ましたは是非旦那様も助けて貰はよ
やアあらチー事が出来ました 辨モ一否がチーく 貴様の辨
口でそんなに貸したか知れチー又相替らす馬を買うから金主
を頼むと云ふのだらふ 長先も不義理があります故お願ひ申
すと云へば直に金の事と思召すがッソではムいませんと山口
辨藏の側も寄り小聲もあつて委細の話をすると辨藏も快く承
知をし直組頭の喜内を迎ひ遣り越前屋佐兵衛を坐敷へ通
し晝飯の仕度をして佐兵衛を進める同人も喜んで馳走にあつ
て居る所へ年頃七十計り何だか入益しそや爺翁が入來り佐
兵衛を尻目にかけて辨藏の側へ行き 喜名主殿お迎ひでムい

まじたが何の用が出来ました、レテ彼所へ飯を喰てる人は見馴れぬ人だが何所のお方でふいます。辨喜内やあれが下谷竹町の越前屋佐兵衛さんだ。喜竹町の越前屋と云ふのは湯屋でがめしやる。辨喜、よ此十五日の騒ぎも家藏を失つたのも構へねえで宮様のお供をして歩きあすつた人で實は目明しの長五郎が連れて来て、四邊を見渡し小聲になり宮様のお使で大平山の慈雲律師様の所へ行くに付て此官軍の圓みを脱れて行くのよ因り長五郎の云ふのよ往來手形を指へて呉れと云ふが夫れよは僕し一人の自由もあらず是非組頭印が入る故夫れで呼んだのだが何分承知して貰い度と名主の話を聞く内に喜内も涙をボロ／＼とばし宮様の御苦勞を遊ばした事を目先きよ見る様と思ひ早速是も承知したので直に往來手形を認め下總國葛飾郡坐和村名主山口辨藏印組頭喜内印、是を長五郎へ

渡す長五郎は押越さ直し佐兵衛を呼んで渡しました佐兵衛は涙を流し兩人の厚意と長五郎の信切と喜び顔を見せ、喜内も涙をボロ／＼とばし宮様の御苦勞を遊ばした事を目先きよ見る様と思ひ早速是も承知したので直に往來手形を認め下總國葛飾郡坐和村名主山口辨藏印組頭喜内印、是を長五郎へ

辨喜内何を云ふんだ往來手形も夜もあるものか反つても晝の内は面倒だらうで一層夜に入つて越したら能かんべい

夜だとも目立つて否が、今から行つた方が能さそうもんだ

喜、や曾でね、此越前屋さんが下谷では顔の廣い人だ僕しは此船の事を能く聞いて知つてるが今日の晝語をして居る官軍は皆さ江戸の者が多い故殊よ依つて佐兵衛殿の顔を知つた者があつては往來手形が役に立たね、夜之交代もあつて國侍ばかり故一層其方が能からふと思ふだ、辨喜、成程、一聞けば夜の方が能えが夜だつたら佐兵衛殿の一人じや面倒だらふ、喜、夫りや僕しと長五郎と二人尾て行くだ、あ、長五郎、長尾て行く所か

上野 否 戦

己が向ふまで行つて又旦那殿が歸んあさる時は江戸まで行く
氣だ 辨そふ二人が氣が綱つて尾て行か心配する事もね
喜儀しも江戸迄行つても能えが年老は反つて邪廣ある故船
まで行つたら暇を貰ひますぜ 佐何から何まで皆様の伊信切
首尾よくお便を勤めまして江戸へ歸り宮様のお手許へ出まし
たら屹度貴殿方の伊信切は申上げますぜ 辨儀し共の名が宮
様のお耳へ這入れればコソナ難有い事はナ 長儀しあんどア
今まで人よ善生の様云はれて居たが今度旦那殿のお蔭で死
な花か咲いた様あものだト交る 一話をして居る内よ日も
暮れ掛る故夕飯の膳よ向ひ銘々仕度も済み其儘年老の喜内と
長五郎が案内をして坐和の渡船場よ参りましたが成程官取の
殿重よ堅めて居りましたが組頭の喜内と目明しの長五郎が知
人だと云ふ保証もあり殊よ往來手形がある故安すトと結へ

上野 合 戦

乗る事よなり喜内の渡船場で佐兵衛よ臥れを告げて歸村とす
る長五郎の同船して渡船場を越し諸宿富田の夜の内に通り大
平山の裏手へ掛つたのが明方でふいます此時佐兵衛の大地よ
手を突ひて 佐サナ長五郎さんか蔭で技所まで参りましたモ
一是からは一人で運淨院へ参ります故貴公は此所から御歸村
を願ひます 長夫れでも此所まで来たもの故寺まで参りまし
よう 佐イニ反つて會して下さると迷惑致しまする廉もふい
ます故恐入りましたは是からか戻り下さいまする様願ひま
す 長伊迷惑をかけてハ濟まねえ故お言葉よ従いか快れ申し
ます 佐段々ど難有ふ存じましたト一禮を述べ金子のあるが
怒じ金子なごを還つたら空腹するだらふと思ひ其儘臥れを告
げる長五郎の涙を拭へて下山をあしサナ越前屋佐兵衛の運淨
院の玄關前へ立ち上野輪王寺の宮御名代深谷佐兵衛慈雲律師

上野谷戦

面會を致度忍作ら宮様御直筆の御書持参の者と申入れる程
院内の者も大に驚き早速案内として慈雲律師より面會具さ
密書の顛末を報告して使命を全ふすると云ふの物語

第三十五席

今越前屋佐兵衛が玄關へ掛り見れば二名の僧侶敷台に手を突
き 僧侶は「東叡山よりの侍使は苦勞を存じます律師の中
侍も依てお出迎ひ申しました」云ひれて鉄圍の佐兵衛も胸中
も驚き何して宮様の使者ある事を律師は承知して居らるゝ
であらふと不審を懐き 佐如何にも頼王寺の宮侍眞筆を持参
の者なれども如何よしして存じであられました 僧今曉律師
よりのお言葉は必ず東台より使者来ると告げられられた其節
大切を取扱へと申されました此事は限らず律師は居るがら
して風雨を知り又能く人の舉動を見て其人の意志を知られま

上野合戦

するか方で「物詣りをしながら佐兵衛を書院へ通す佐兵
衛は上坐して床の間へ職なき竹杖を備へ其前より叩ひましたか
ら案内の僧侶の驚き 僧モ「枝杯を床の間へ置ての相成
りません此所へお還りしさいまし 佐イエ」此杖は大切
の品故手前が守護致します 僧夫れでも今大僧正並に律師侍
對面は相成るのよお目障りなされば手前共が叱られます故何
かお渡し下さい 佐イエ私より此杖が大切でムいませす」話の
内は襖紙を開き緋の法衣と二十五疊の袈裟を懸て中啓を持ち
左よ水晶の珠數を携へお立出な相成りしに迷淨院大僧正又右
の襖紙を開き風の服と律師法衣を纏ひお立出なありし年頃
三十一二是有名の慈雲律師でムいます外より一人の僧侶
も見へません阿僧は頭を下げ其鄭重なる事實を言簡と盡くせ
ん位此時 律此度の宮にも願かし御心痛であらせられたであ

上野谷戦

らふ伊兵衛の口で拜領致度下手を突て申し相成る此時佐
兵衛は彼の息杖を取出し其中よりお墨付を竹林坊よりの書状
是を側より取りし三寶を載せ律師の前へ差置き 佐藤殿に
某へ添ふくも大切の伊使を仰付られし其節律師も手渡しせよ
どの伊言飛速に伊請取下し置かれ度下律師も渡すと直に坐を
下り遙か末坐に頭を下げる此時連淨院僧正は初めて頭を上げ
る夫れまでは宮様の伊書簡を預りし人あれば依て敬禮を厚ふ
したものと見へ律師は佐兵衛と入替り上坐と控ひ座で伊墨付
を抜き再拜展讀致しました書中如何ある要件がふいましてか
是れこそ門外漢の得て知る所ではふいけません併し竹林坊僧正
の書面は此上宮様は身体安全の伊祈禱を伊依頼となりました
手紙でふいましたる由拜讀し終ると再び三寶へ載せ是を前へ
置き 律佐兵衛と申すか此度の使節はなか／＼容易あらぬ

上野谷戦

折であつた此上は宮始め竹林坊僧正等お立退の次第を逐一
語りをして貰ひ度下仰せよ初て越前屋が茲で戦争の次第から
三河島村へ立退の願未より尙淺草田甫の東光院まで表向き
目通り仰付られ此度の伊用仰付られたる事までを素より記
ふ富める佐兵衛の事故目前に見るが如くは物隔りを致されま
した底で律師も僧正も膝を進めて承り大さ其戦争の概略
をお知り遊ばす位却佐兵衛も疲れて居る様子故一日大平山
連淨院へ逗留を申し翌日連淨院寺侍の姿も化し往來手形も連
淨院の印判の据りし物を貰ひ殊に江戸の方へ行くのは道中も
心安き時なれば速く是は江戸へ歸り途中別段も申上げます
義もムりせんナレは佐兵衛が江戸へ歸つた前日は宮様品川
沖碇泊の長船艦へお乗込の跡にて拜顔を返せぬ故佐兵衛は夫
れを誠と遺憾と思ふのを感し／＼聞えらるるので一先住別れし

江戸を跡にして仙台へ参り靈様を拜願するの一段の後席と云ふのお話

第三十六席

茲元評定所留役を勤めたりし高野大五郎此仁は覺王院僧と別懸の間柄にて東台と砲臺を聞くの前より謀々々盡力をなした人で下多古村の小原長兵衛の方へ宮様お引取りなる羽竹林坊僧正とも能協賛して何分江戸府内にか置き申しては宜しからず依て望む所の奥羽地方向會津表へも伊案内を致す心組夫れには陸路は逆も官軍の爲に通を厭せられ伊案内もあり兼ねますゆえ是非海路を水戸の平瀨まで行けり伊案内もあり兼馬守梓豊三郎は豫て夫れく伊案内もあれば平瀨まで行きさいますれば最早御安心なれど其船と申せば是非品川沖に投給せ

る板本提督も面會して依頼せんと高野大五郎は三河島にてお臥れ申し何か品川沖へ参つてとは思へる海陸の警戒既も厳重にして回陽艦へ参るべき手掛はあく茲も苦心して居りますと此時淺草の山谷に住居る料理人で吉藏と云ふ者がふいまして是は元下谷の松源の料理人で雇丁では其頃江戸表で幾人と云ふ程の腕前で痕痕が澤山ある故籍名をアバ吉と云ふた有名の男で此仁もあか義氣のある人で高野大五郎とは親しく都合の間柄を、お序も申上げますが此アバ吉は高野と俱に船の都合をしたのが縁もあつて遂には奥州まで行つて矢張り宮様のお側へ居りましたが後々竹林坊僧正のお供をして京都へ行つて其後江戸表へ歸り伊一新革命の頃より日本橋物町へ割烹店を出した倉田屋が即ち此アバ吉でふいます日本橋近所でも一二を争ふ店で此吉藏と云ふ人は一昨年死去致しましたが大の

慈善家公共事業杯よは本先して發捐致しするのを無上の樂
 として居る位實に東魂で立派な人でありましたが七十の高齡
 を越して病死致されました或る日高野は山谷の吉藏の所へ一
 杯機嫌で尋ね 高吉や家に居たか 直是は旦那相替らす能い
 色でムいませう 高酒が離れると河童が岡へ上つた機で心持
 が悪い故モ一朝から酒だ、ア貴機は又釣るか 直私は世の
 中よ釣程面白ものあるまいと思ひます夫れも此頃は台場
 の沖で大層ハセが釣ますから是から出掛る積りでモ一此頃は
 馴染よあつたから能うムいませうが官軍が來ちやア身分は何だ
 の住居は何所だのと七六ヶ敷い事を聞べられて困りましたが
 此頃は二人どねい顔色でムいませうから私の船へは余まら官軍
 が來ちありました 高何の爲よ調べるんだ 直何徳川様の
 船が沖へ歸を仰して居るもんでムいませうから夫れへ出入をす

るだらふとか又は送りものでもすると思つて夫れで殿しいの
 でムります 高回陽や其外の艦へは行くのは六ヶ敷を 直を
 ア官軍の方で幾等見て居たつて私共は始終軍艦の側へ行つ
 て釣りをして居ります故艦も居る人は皆徳川様の家來だから
 話が早くて面白ムいませう一昨日杯は「ハセ」の二百も上げて來
 ましたがさんも喜んだか知れませう 高何だ吉藏今日は私
 を同船さして呉れまいか 直旦那貴公は釣りが嫌いじやムい
 ませんか 高釣りは嫌ひだが親本の船へ是非行かねばならぬ
 事がある故吉藏迷惑乍ら連れて行つて呉れ 直夫りや否けませ
 ん軍艦へ上つて此間二三人官軍に捉まりました何云ふ譯だか
 大變よ八釜しうムいませうが併し其用向よ依つたら私も吉藏だ
 か連れ申さんとは云ひませんが只ナヨロツカを事じやか願ひ
 でムいませう下竹を割つた機も吉藏の氣象故今は高野大五郎も

上野谷戦

隠す所でもないと思ひ今日宮様御進退の儀も付苦心する由と復
本氏も依頼して船の都合をして貰ふ由を巨まくと物断りを
すれば江戸ッ兒肌のアバ吉も承知したと見へて頭を下り
且那様解りもした何時も御酒を召上つて少した様事ばかり
仰て居るから取止りのねえか方だと質は思つて居りました
サアお侍様は又別でそう云ふ事なら其姿じや否ひませんから
積くも私の衣物でも着てそうして一所よか出さるしト辨當其
外の仕度をして慶應の四年五月廿一日幸ひの波穩ゆえ山谷堀
の堀三より一艘の船を雇ひ品川沖へ出でて見れば成程海上の
堅め殿重にしてまかへ回陽へ近づく事もなり衆る位あれば
幸ひアバ吉の働めて復本鎌次郎殿と對面をなし今日宮の御身
の上を謀り復本氏の厚意を以て軍艦長船へ宮様を案内するを
云ふのお話

上野谷戦

第三十七席

高野大五郎並に料理人の吉藏は山谷堀より網船にて品川沖へ
行き幸ひ官軍に調べられもせずお盛場を離れると間もさく俄
の烈風よて夫れつと云ふ間もさく船ハクル廻り始めた船
頭と吉藏の青くありモ一助かるまいと思ふ位高野大五郎の切
りも洩水をかいて居る内も幸ひ回陽の臨へ吹付けられました
ヌルト船中よりも是を助けてモ合つて遣り色々吉藏へ氣付
杯を下さる大五郎の此体を見て未だ宮様の御運の末でもない
と喜んで船も上り初めて宮様の御使ある事を申し復本鎌次郎
氏も面會し是までの次第を語り此上船を御都合下されん事を
只管頼みしとき流石徳川の屈指復本提督故一になく承諾し
長鯨艦を御乗艦も充て尙艦柯を鉄砲州の河岸近くへ廻航すべ
き約束を致しました此長鯨と云ふ船は軍艦でふいまして長さ

上野谷戦

四十二問あつて砲臺の備へありまする艦で艦長の水戸の人で
森山某と云つて頗る航海學を精しく此仁も覆本氏の照會に
依て大五郎も面會をあり五月廿五日夕刻まで船を廻すの約
束を確め底で大五郎の覆本氏も次第を告げ元の網船へ戻り其
吉藏の矢張り長崎に居て始終の様子を聞き誠と徳川士の雄々
しき姿を見て實つと感心をあし是れも俱に網船を乗りか台場
脇より歸りました途で中官軍も出遇いました難風も吹ひ漸
く只今歸りましたと答へたのみ別々嚴しい調もあく大橋まで
同船しましたが大橋より大五郎は上陸をあし吉藏一人は山谷
へ歸りました茲で暫く吉藏の話の預りと致して置きます、サ
其夜大五郎の市ヶ谷自昌院へ赴き竹林坊僧正淨門院淨應院
へも面會を留みました各々も待つて居る大五郎の事ゆえ夜中
さの云ひあがら物靜かある座敷へ案内を致し 高改は暫くで

上野谷戦

ムいしました遠より伺い申上げまする筈なれども衆て僧正と
お約束申せし艦の都合にて暇取れまして夫れ故延引の段恐入
ります宮様には御變りもあらせられませんか 竹其方の便を
日々相待つて居た宮よはな變りもあく居らせらるゝ故安心致
されよ艦は何云ふ都合であつた 高左様今日漸く網船にて品
川沖へ赴き拙者も取れば幸ひの暴風回陽艦へ吹付けられまし
たも僥倖早速覆本氏も面會致し委細相頼み候處同人も快く承
踏致し呉れ本月廿五日迄は鉄砲州の近方まで艦を遊廻します
約束を致しました故此段宜しく御披露を願ひます 淨門何時
もく大五郎其方の働は別段宮も働かし御満足と思召すであ
らふ併し其長崎とやら艦まで出よある途中は如何致したる
のであらふか 竹左れば其事が差當つての難儀愁じ夜中か立
出よなつたり又御籠杯で出よあれば反つて官軍の目も付く